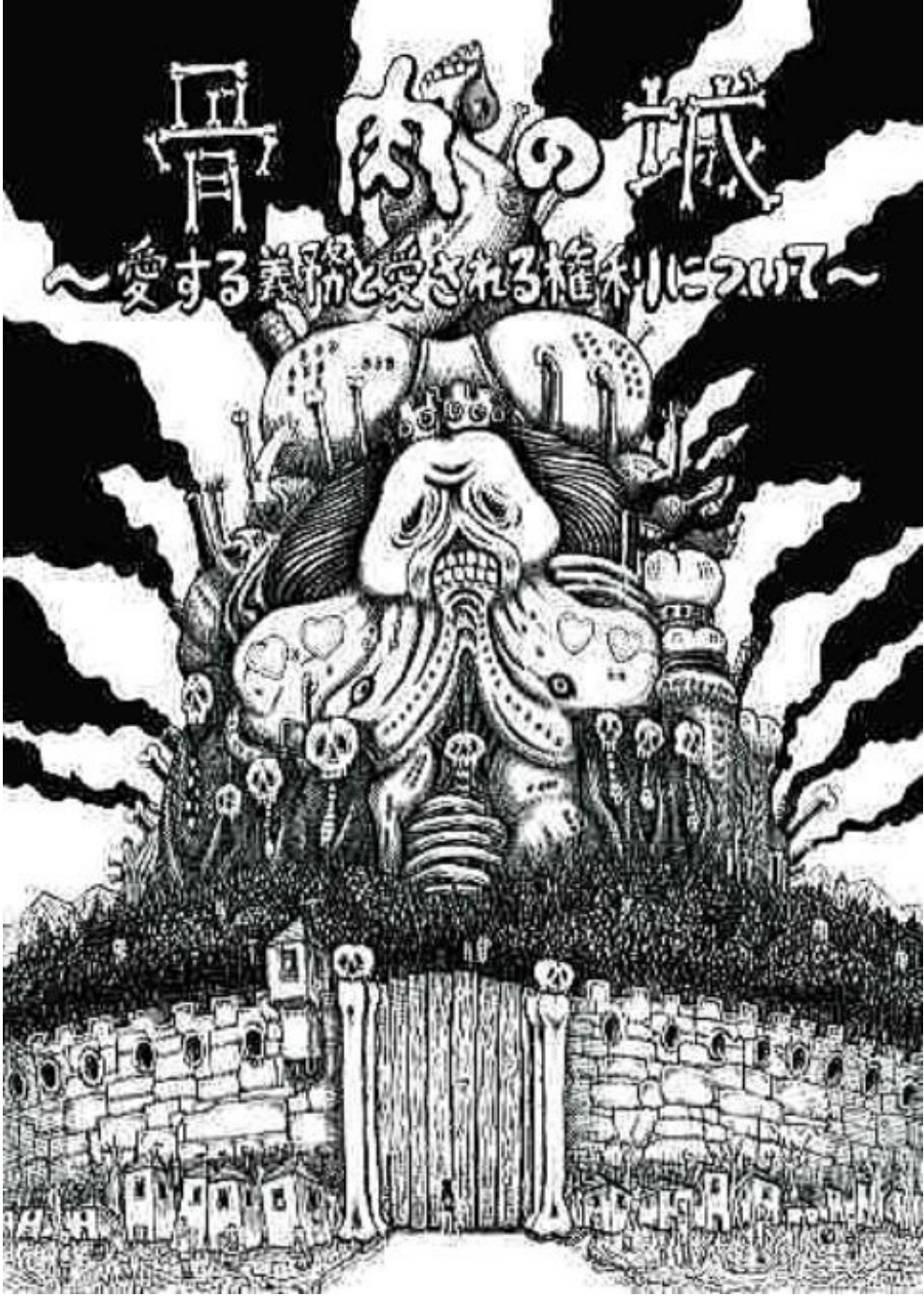


# 骨の城

～愛する義務と愛される権利について～



# 1章

---

【音楽～時計～】

自己という名のこの国をおさまるべきは

本来ならば、僕なのだけど。

未だに、パパがこの国を治めている。

それは僕が頼りないからであり

実力が伴っていないからであり

どうしたいかということもあやふやであるからだ

この国のルールは、すべてパパが決め、僕もそのルールに従っている。

ルールに従わなければ、禁固刑に課せられ、自責の念を延々、

念仏のように唱えさせられる。

王宮の中に住んでいるのは

パパと僕と執事の八木ちゃんだだけだ。

王宮の周りには、高い城壁と鬱蒼とした森が取り囲んでいる。

門には門番がいる。

この王宮の中には誰も入ることはできない。

はずだったんだけど。

パパ以外の

国語とか算数とか理科とか社会とか

いろんな知識が僕の中に入ってきて

パパ以外の

友達とか先生とかライバルとか好きな子とか

いろんな人が僕の中に入ってきて

あれ?、僕の世界って一体どこにあるんだ。

ってことに気付いて

僕は何が正しいんだかがわからなくなってしまった

はたして僕は一体全体なものなんだろうか

【音楽～時計の音in～】

王子、ゲームをしている。

部屋の中にはたくさんの遊び道具が置いてある。あまり楽しそうではない。

《門番の独白》

警備員の格好をした男が立っている。

【音楽～時計の音out～】

[次、次と人が通っていく]

ちよ、ちよつと。

ちょっと！まって。

ちょっと！あー。

[みんな寝ている]

いや。ほんとうは。ここは通っちゃダメなんですよ。

いや。確かに今はもうたくさんの方が勝手に出入りするようになってしまいましたけど。

規則としてはね、まだ通っちゃいけないってことになっているんですよ。

でも。ほら、実際はここを通ったほうが近道だから。

わかるんですよ。わかるんですけど。それはまあ規則なので。

はい。私は門番です。

だから、通すわけにはいけないんですよ。

だから通ろうとする人には必ず言ってるんですよ。

通っちゃいけないんですよ、って。規則で裁かれちゃいますよって。

ああ・・・リストですか？一応。はい。これ。

・・・いや、あの、途中までは、ほらちゃんと録ってたんですよ。

でも。これ。ね。書ききれなくなっちゃって。はは。

リストを投げ捨てる。

うん。いや。だから。どうなんですよ。一度だけ。

一度だけのつもりで

通してしまったんですよ。

そしたら

このとおりです。

はい。

もう、どうすることもできないんです。

時刻は現在 深夜2時です。

《深夜の王子》

王子「あーだめだー。」ゲームオーバーになる。

《深夜の女子》

女子、携帯を顔の前にセットし、髪などを整える。

女子「あ、あ、つながってる？これ？」

客3「どうもー」

客2「どうもー」

客1「どうもー」

女子「お初で一す」

客2「え、なに？リアルJK？」

女子「明日からリアルJKですよ」

客3「半熟」

客1「JCもあります」

女子「はい」

客2「服脱いで」

女子「いきなり」

客3「乳首みせてよ」

女子「あとでね」

客1「とりあえず、顔みせてよ」

女子「顔だしNGなんですー」

客2「とりあえず、ボタン一つはずして」

女子「はい。はい。」

客3「おお！」

客1「きたー」

客2「やばいオツきしてきた」

客3「オナニーして」

女子「あとでね」

客1「まじか」

女子「まじまじ」

客2「やべえ。リアルJK」

客3「生オナニー」

客1「週なんくらいでオナニーするんですか」

女子「週3」

客2「逆にリアル」

客1「どうやってするんですか」

女子「いろいろ」

客2「今日は何使うんですか？」

女子「何がいいですか？」

客3「電マに一票」

客1「もう一票」

客2「あえて、ディルド」

客3「捨てがたい」

客1「北風と太陽作戦だ」

客達「おおー！」

女子「なにそれ」

客2「暖房つけて」

女子「え、いいけど」

客3「なんか熱くないですか」

女子「ああたしかに、熱くなってきたかも」

客3「うでまくりすれば」



女子「あーそうだね」

客1「きた一二の腕萌え」

客2「しゃぶりだい」

客3「二の腕のやわらかさは胸のやわらかさに等しい」

客1「もんでみて」

女子「(二の腕を) え、こんな感じ」

客2「やわらかい」

客3「大きいですか」

女子「小さいです。」

客3「ドンマイ」

女子「うるさいわ」

客2「僕はまな板好きですよ」

女子「ありがと」

客1「ほんとに小さいの」

女子「ほんとほんと」

客2「たしかに口だけかもしれないしね」

客3「確かめてみないとね」

客1「じゃあ、暖房を5度上げてみようか」

女子「えー暑いし」

客2「おい、こいつやる気あるのかよ」

客3「釣りじゃね？」

客1「ボタンもう一個はずしてみようか」

客2「外せよ」

客3「あーこれ、釣り確定だわ」

女子「え、待って。待って。」

客1「落ちまーす」

女子「待ってって。」

客3「なに？」

女子「オナニーすればいいんでしょ？」

女子、ピンクローターを出す。

客2「よろしくお願いします。」

女子、シャツの中に手を入れ、スカートの中にローターを入れて、オナニーをする。イク。

客、携帯を擦る。イク→事務的にティッシュで

女子「いっちゃった」

客1「d ウインボン」

客2「d うインボン」

客3「d ウインボン」

女子「・・・なんつーって。1分150円なら悪くないよね。」

【音楽～序章～i n】

《王子の独白》

僕は、果たして。期待に答えられたらどうか。

僕は、がんばりました。

どうか。期待に答えようと思いました。

でも。無理でした。

貴方達が僕に夢を語るたびに。

僕はその高い頂をみて、疲弊しました。

いっぱい食べなさいと、用意したご馳走を

見るだけでお腹いっぱいになって、気持ち悪くなりました。

貴方達の愛は

常に僕に對価を期待しているように感じました。

無償の愛をいうものを感じたことはありません

愛の押し売りっていう奴ですね。

これは。

期待に答えられなくて、ごめんなさい。

これが、僕のせいいっぱいです。

早いとこ、あきらめてください。

もう、もはや、障害だと思ってください。

すべてが、努力でどうにかなるものではないんです。

それを受け入れてください。

そんなに残念な顔をしないでください

そのことがどんなに僕を傷つけることでしょう。

言葉につまらないでください。

他にも何か話すことはあるでしょう。

たわいものない会話をしましょうよ。

それでも、僕を愛してくれますか

良い子じゃなくても

僕を愛してくれますか

愛するべきでしょ。

君達は

父と母

なのだから。

そうでしょう。

僕が、どんなにダメな人間でも。

貴方達の愛はなんですか？

どうして、そんなにも

不自然なんですか。

]

## 《女子の独白》

私は、誰にも期待をしていません。

誰かに頼ったり、

何かに依存したり

そういうことって

よくないって思うんです。

だって、ほら。

もし、唐突に、その、頼っていたものとか、そういうものが無くなってしまったとしたら

ずっこけちゃうじゃないですか。こう、あーって、笑える感じで。ね。

ずっこけて、足とか怪我して、脳とかも損傷して。下半身とか麻痺して。

もう二度と、自分の足で立つことができなくなってしまうじゃないですか

そうならないように

はじめから、自分の足で立っていないとね。

私は、いままで、自分のことは

自分でするようにしてきましたし

そういう風に生きてきましたし。

つらくなんかありません。

もうあたりまえになりましたし。

はい。

だから。

あんまり私のことをこれ以上詮索しないでください。

どんなに先生が

私に心を開いたとしても

私が先生に心を開くことも

頼ることもありませんから。

でも。ありがとうございます。

夢ですか。

そうですね。

私は見返してやりたいんですよ。

貴方達みたいにクソみたいな親からも

こんなに素晴らしい

子供が生まれてくるんだよって

こんなに立派に人間は育つんだよって。

はい。

そのくらいです。

王子「愛してほしい、愛してほしい、愛してほしい、愛してほしい」

女子「愛してほしい、愛してほしい、愛してほしい、愛してほしい」

王様「愛せない」女性「愛したい」執事「愛してる」

母親「愛せない」男性「愛したい」門番「愛してる」

《初めての会話》

女子「お初ですー。

王子「はじめして」

女子「どうも」

王子「あのこれ。カメラの位置あってないけど」

女子「あー顔だしNGなんです」

王子「そうなんだ」

女子「なにやってる人ですか

王子「・・・社会人」

女子「へえすごい どんない仕事してるんです

王子「先生

女子「えー、超やばくないですか

王子「まあね

女子「教科はなんですかー」

王子「んー。理科かな」

女子「えー理科とかすごーい。あれですよーね一台車とか、滑車とか

王子「ですよ。君はいくつなの？」

女子「あしたから高校生です」

王子「へえそうなんだ、おれも」

女子「女え、そうなの」

王子「ごめん、さっきうそついた」

女子「そうなんだ」

王子「なんか眠れなくてね」

女子「あーあたしも」

王子「でも、やることなくて」

女子「うんうん」

王子「こういうときってどうしたらいいんだろうね」

女子「んー。そうだねー。」

王子「なんかたわいもない話をしたいな」

女子「いいね」

王子「うんと」

女子「今日はどんな一日でした？」

王子「えー。どんなだろう。えっと。とくになにもやることもなかったんだけど、朝七時くらいにおきちゃって、二度寝しようと思ったんだけど、ねむれなくて。だからまあなんとなく外に出て、ちょっと歩いて、近くの、ダムみたいな、湖みたいなどころがあって、そこの土手に座って。寝たり起きたりしながら、ぼけっとしてたね。」

女子「へー。そっかそっか。」

王子「そっちは？」

女子「わたしはね。一日中バイトしてだ。あ、あとバイト終わりにケバブ食べたわ。」



王子「あ、俺もケバブ食べたわ」

女子「え、うそ」

王子「え、まじで」

女子「まじまじ」

王子「え、もしかして同じケバブ屋じゃね？」

女子「え、そっか、それありうるか」

王子「ありうるでしょ」

女子「どんなケバブ屋だった？」

王子「なんか赤いワゴンで、白い字でケバブって書いてあってなぜか一緒にクレープとか売ってるの」

女子「え、うそ、一緒！で、あれでしょカラフルなアフロのトルコ人だった」

王子「一緒だわ。カラフルなアフロ。いや。これは、すごいことだよ。奇跡に近いことだね」

女子「うん、これはまさに奇跡だね。これを奇跡と呼ばす何を奇跡とよぼ一かね」

王子「・・・」

女子「・・・」

王子「なんだこの話」

女子「うん。なんだ、これ」

王子「どうでもいいわ」

女子「うん、どうでもいい」

男子「ちなみに、トルコ料理って世界三大料理のひとつらしいよ」

女子「へーそうなんだ」

王子「あ、じゃあ。」

女子「あ、じゃあ」

王子「御後もよろしいようで」

女子「まあそうですね、はい」

王子「おやすみなさい」

女子「おやすみなさい」

王子「あの」

女子「はい」

王子「またどこかで」

女子「はい、またどこかで」

女子「寝るか」

王子「寝よう」

## 2章

---

《朝・それぞれの家》

【音～目覚まし時計in～】

目覚まし時計を投げる。ベッドに横になる。 ノックの音がする。

執事「ぼっちやま。起きてください。ぼっちやま。ぼっちやま！王子！」

【音～目覚まし時計out～】

王子、ベッドから立ち、ドアを開ける。

王子「うるさいよ。おきてるよ。」

執事「おきてるなら返事をしてください。」

王子「おきてるんだから返事をしなくたっていいでしょ」

執事「じゃあ、なんでございますか。返事がなかったってことは起きてるんだなって思えばいいんでございますか？」

王子「はいはい、今日の予定？」

執事「はい、8時から入学式、8時30から、……」

《女子》

女子「おはおう」

王子「パパは？」

執事「お仕事です」

王子「そうか、仕事なら仕方ないね」

全員「いってきまーす」

【音～チャイム～】

## 第2章

《初めての挨拶》

男性「規律」

女性「気を付け」

男性「礼」

女性「着席」

男性「えー。どうも。」

女性「はじめまして。こんどこのクラスの担任を務めることになりました

男性「教諭

女性「教諭

男性「といたします。」

女性「よろしくお願ひします。」

男性「えー。まああの。そうですね。あの、」

女性「こんなの、まあ隠してもしょうがないので言いますと、」

男性「僕は」

女性「私は」

男性「このクラスが教員としてはじめて担任をもつクラスです。」

女性「ね。そう言うとみんな不安に思うかなとも思うんだけどでも、」

男性「一生懸命がんばりたいと思いますのでよろしくお願いします。」

女性「ね。それは、もちろん、正直、私も不安です。」

男性「不安で不安でしょうがなかったです。」

女性「ほんとに、ちゃんと、みんなの担任として」

男性「みんなをちゃんと愛せるかなって」

女性「すごい不安でした。」

男性「僕、実際、ドライなところとかもあるし。」

女性「でも、来年担任になるよ。って、校長男性から言われたとき、」

男性「そんな不安も消えるくらい、」

女性「嬉しくて」

男性「ドキドキして、」

女性「あー。子供が生まれるってこういう感覚なのかなあ

男性「あー。子供が生まれるってこういう感覚なのかなあ

女性「って思ったりして、

男性「今日、この日がくるのを」

女性「ほんとに、楽しみにしていました。」

男性「えー。僕は、みんなの、」

女性「お母さんでも」

男性「お父さんでもないけど。」

女性「本気、みんなのことを」

男性「愛していきたいなあと思っています。」

女性「それってどうすればいいかは、わからないけど、

男性「みんなのことを自分だと思って自分の一部だと思って、いろんなことを」

女性「真剣に考えていきたいと思っています。

男性「そんな感じです。

女性「えっと。あと、このクラスのルール。一応発表しておきたいと思います。

男性「ひとつ目、ひとを不幸にしないこと

まああたりまえなんですけど。ものをとったり、誰かの悪口をいったり、暴力を加えたり、人を人として思わないように扱ったり、授業中大きな声でおしゃべりをしたり、そういうことは人の幸せを奪うことです。そんなのは奴隷と同じです。最低のことです。やめてください。

女性「ふたつ目、自分を粗末にしないこと。

授業中に寝ていても、漫画を読んでも、音楽を聴いていても誰も不幸にはしていません。

自分を自分でせめることも、自分をおとしめることも、誰も不幸にはしていません。

でも、それは自分を粗末にするということです。それは、もったいない。せつかく、いま、こうして奴隷ではない人間として生きているんだから、そのことに感謝し。一生懸命、幸せになろうとしていきましょう。

男性「みつつ目、奴隷に優しくすること

奴隷を傷つけたり、奴隷のものをとったりしても、誰も不幸にはしていません

けれども、奴隷がいなければ、この社会がなりたないことも事実です。

ですから、モノを大切にするように、奴隷にも優しくしてあげてください。

女性「よつつ目、

男性「ルール」

女性「に従うこと。髪を染めることや、ピアスをつけることは、自分も人も奴隷も不幸にしているかもしれません。でも、

男性「ルール」

女性「は」

男性「ルール」

女性「です。その」

男性「ルール」

女性「にはその」

男性「ルール」

女性「の意味があります。その」

男性「ルール」

女性「があるからこそ、自制を保ち、みんなが幸せに暮らしていくことができます。でも、」

男性「ルール」

女性「を変えることなく、」

男性「ルール」

女性「を破ることは、みんなが納得いきません。ずるです。みんなの幸せをうばうことになりかねません。ですから」

男性「ルール」

女性「は」

男性「ルール。ルールはルールル、ルールル、ルールル・・・♪



男性「なお、授業中の携帯電話を使用しているのを発見した場合は問答無用でとりあげますので。だあこらうおい！  
よろしくおねがしします。

《王子の面談》

女性「はい。じゃあ。次、王子くん」

女性「・・・」

女性「どうも、よろしくお願いします」

女性「どうも

王子「聞こえてる？」

女性「緊張してる？」

王子「え？緊張しないでしょ」

女性「そっかそっか。えっと。じゃあ。さっそく2者面談の方をしていきたい思うんだけど。」

王子「は一あ」

女性「まず、この時期のこの2者面談の目的だけど。先生は今、40人の子供を抱えているわけなんだけど。その一人一人と話をして、」

王子「はあーあ」

女性「じゃあここ省略して。んー。眠そうだね」

王子「はい」

女性「そっか。寝るのおそかったの」

王子「昨日、寝たの2時なんで」

女性「2時！？なにしてたの？そんな遅くまで」

王子「別に。普通に。携帯見たり。ゲームしたり」

女性「へえどんなゲームが好きなの？」

王子「え？そんなん言ってもわからないよ」

女性「言ってみてよ。先生も昔はよくやったんだから、ポケモンとか」

王子「ポケモンとか、くそゲーでしょ」

女性「え、うそ。そうなの？」

王子「なによりRPG系なのにストーリー性がないのがだめだよね。」

女性「そうかなあ、私は面白かったけど。」

王子「どうせ流行に乗っていたたででしょ」

女性「そうかもしれないけど、王子くんが最高だと思うゲームはなんなの？」

王子「え、？だから、言ってもわからないよ。」

女性「言ってみてよ。なに恥ずかしがってるの？」

王子「は？恥ずかしがってねーし」

女性「じゃあ言ってみてよ。」

王子「だから、スマブラとか・・・」

女性「スマブラ・・・っていうのは、スマートブラジャー、ワコールによって開発された貧乳向けブラ」

王子「そんなのないよ。大乱闘、スマッシュブラザーズだよ」

女性「へえ・・・どんなゲームなの？」

王子「だから、対戦型格闘ゲームで、任天堂のゲームの人気キャラクターどうしが戦うっていう。」

女性「任天堂って、マリオ とか ドンキーコングとかでしょ！」

王子「そうそう。そんななかでも一番かっこいいのが、ソニック！ソニック・ザ・ヘッジ・ホッグ。別名、音速ハリネズミ、もともとはゲームセンターとかで有名なセガのメガドライブってゲーム機から発売されたキャラクターなんだけど。それが任天堂にまさかの参戦をしたんだよ。スマブラで」

女性「あー 音速ハリネズミ」

王子「ああ。ごめんなさい、つまらない話して。」

女性「あ、ごめんね。私、ポケモンぐらいしかやったことなくて」

王子「ああそうだよ。え、もう終わり？」

女性「いや、まだ。まだ全然話してないし」

王子「話したよ。」

女性「ゲームの話しかしてないじゃん」

王子「じゃ、なに。あと何話すことあるの？」

女性「だから、王子のもっと、良いとことか知りたいし」

王子「あー良いとことか持ち合わせてないんで」

女性「いや、あるって王子くんにも絶対」

王子「じゃあ、どこですか？」

女性「え？・・・んー。あ！んー・・・ちよつと待ってね、えっと」

王子「そこ。言葉につまるなよ」

女性「いや。誰にでもひとつくらいはあるもんなんだよ。だけど、あれ？あれ？のよ。だから、えっと」

王子「もういいよ」

女性「あ、ほら！ゲームくわしいじゃん。豚足ほもねずみをスポブラをつけるんでしょ？」

王子「違うよ！音速はりねずみがスマブラに参戦するんだよ！！！」

女性「あー、それぞれ」

王子「もういいよ。」

女性「あ、今日、自転車の補習ちゃんと出るのよ」

王子「はいはい」

女性「はあ」

《女子の面談》

女子「あ、もういいですか」

男性「おお。どうぞどうぞ」

女子「失礼します」

男性「はい。どうぞどうぞ・・・♪」

女子「短めをお願いします」

男性「まあはい。えっとじゃあ面談します、まず。趣味は」

女子「特に」

男性「おおそうきたか。えっとなんでもいいんだよ。音楽鑑賞とか、読書とか」

女子「あーじゃあ読書で」

男性「じゃあって。」

女子「え、でもほんとに好きですよ。ホラ」

男性「ああ。ほんとだ。え、結構好きなの？」

女子「結構好きですね」

男性「どのくらい読むの？」

女子「一日、9冊ですかね」

男性「9冊ってすごいね」

女子「3冊を同時に読むんで」

男性「お、おお。あまり想像ができないけど」

女子「まあ。いいです」

男性「なんで本が好きなの」

女子「なんとなく」

男性「なんとなくなんだ」

女子「あーじゃあ。現実じゃないところに行けるからですかね」

男性「あ、それはわかるかもね。日常じゃ味わえないドキドキっていうかね」

女子「そういうのはちょっと違うんですけど」

男性「あっそう。」

女子「面白いですね」

男性「え、ほんとに？嬉しいな、あは」

女子「ゴリラみたい」

男性「ゴリラっておい！」

女子「面白い」

男性「あはははは。おっと、いかんいかん。脱線してしまった。先生はすぐ脱線をする」

女子「そうですよ。残り時間2分ですよ。」

男性「え、うそ。じゃあ、自分のことは好き？」

女子「自分のこと好きなひとなんているんですか？」

先生「僕はまあわりかし好きになったけど」

女子「へえ。めずらしいですね。」

先生「いや、昔は嫌いだったよ。いや、好きになったっていうわけじゃないかな。そんなに嫌ってても仕方ないっていうことに気づいたんだね。」

女子「へー」

先生「興味ない？」

女子「はい」

先生「興味ない・・・お父さんはどんな人？」

女子「いません」

先生「ああそっか、ごめん！ほんとにごめん！」

女子「そういうのやめてもらえますか？」

先生「あ、ああ。すまん。じゃあ、お母さんは？」

女子「います」

先生「あ、そう。そうか。よかった。似てるの？」

女子「全然。」

先生「歳はいくつくらいなの？」

女子「え？紹介してほしいんですか？」

先生「違うわ。こら」

女子「32歳です。」

先生「え。同じ年じゃん。」

女子「えーそうなんですか。」

先生「え、なにしてる人なの？え、血液型は？どんな髪型？胸は大きいの？」

女子「それ、なんか関係あるんですか？」

先生「ああ……。関係ないか。関係ないな」

先生「お母さんのことは好き？」

女子「そうですね、いいひとですね」

先生「……。君のいういいひとってというのはどんなひと？」

女子「……」

先生「ちなみに僕はいいひと？」

女子「いいひとですね」



先生「そっか」

女子「ひとから嫌われないようにがんばっているひとのことですかね」

先生「あー、俺もそうか。まあそうかな。嫌われたくはないもんあ」

女子「まあそうですよね。でも、わたしはそういうの風にはなりたくないんです」

先生「そんな覚悟じゃ、君のところまではいけないってことなんだな、死にもの狂いでいかないと、ダメだっていうことなんだね」

女子「別にそこまでは求めてはないですけど」

先生「でも、先生は死ぬ気でお前のところまでいくぞー」

女子「だから、求めてないんで」

先生「あ、うん。あは！」

女子「でも、私、そんなに嫌わないんで、ちゃんとってほしんです」

先生「なるほどね。」

女子「はい、おしまい」

男性「じゃあ。言うけど。」

女子「なんですか」

男性「そんな感じじゃダメだと思う。」

女子「そんな感じってどんな感じですか？」

男性「えっとね。だから。作っている感じだよ。」

女子「なんでですか？」

男性「人からの影響とかをどこかでシャットダウンしてるから。だから、君はいつまでたってもそのままだ

女子「いいじゃないですか。このままでも。むしろ、変わりたいとか思っていないんで」

男性「へえ。そう。本当に？」

女子「本当ですよW」

男性「その笑顔。ひきつってるよ」

女子「だって、心じゃ笑ってないですもん」

男性「笑うことはあるの？心から」

女子「あー。どうでしょう？わすれちゃいました」

男性「それは問題なんじゃないのかな」

女子「えー。問題だなんて。ひどい。私、問題児扱いですか？」

男性「ちゃんとしゃべろうよ」

女子「しゃべってますよ」

男性「しゃべってないよ」

女子「あぁなんかむかついてきたんで終わりにしませんか」

男性「まだまだ、子供だな」

女子「子供扱いしないでください」

男性「だって。僕の指摘で頭にきちゃったんでしょ」

女子「なんですか。これは。なにをしたいんですか」

男性「君と話をしたいんだよ」

女子「話てるじゃないですか」

男性「話してないよ」

女子「もうバイトなんていいですか？」

男性「は？バイトって？なににやってんのバイト？」

女子「居酒屋と漫画喫茶のキャッチとコンビニと工事現場と・・・」

男性「え、多すぎじゃない？」

女子「え、そうですか。」

男性「ていうか、バイト。禁止だって知ってるよね」

女子「え？でも。みんなやってますよ」

男性「みんなやったらいいの？」

女子「だったら、先生たちもちゃんとバイトを禁止する努力をしてくださいよ。」

男性「・・・」

女子「はい。私の勝ち。さようなら」

《出産の欲求》

男性「っていう感じだったの」

女性「マジかー」

男性「絶対、重たいなんか抱えてるっしょー」

女性「ドメスティックバイオレンス！」

男性「ネグレクト！」

女性「きゃー」

男性「そっちはどんな感じだったの」

女性「こっちもなかなかだったよー。クラス全体の割合として、アスペルガー3割、学習障害5割、多動が2割ってところかな。」

男性「って、ここは病院か！」

女性「まあ多かれ少なかれみんななんか抱えてる感じだよ」

男性「いや、子育て大事。子育てとか、まじ鬼畜だわ、ほんと」

女性「え、ちなみに子供についてどう思ってるの？」

男性「愛というサービスを安定して提供すべき、大事なお客様だと思ってるよ」

女性「いや、そうじゃなくて」

男性「なに？」

女性「だから、子供は欲しいと思ってるのかな、と思って」

男性「え？なにこれ、真面目な質問？」

女性「え、あ、うん。できれば、そうね。真面目に答えてもらいたいけど」

男性「ん————。え？いや、あ～、なるほどね。いや、でも。あ～でも、逆に？逆に？」

女性「ん？ん？大丈夫？」

男性「おーケー、わかった」

女性「どうなった？」

男性「まずさ、おれら聖職者じゃん？一応。」

女性「ああ。先生だからね」

男性「でしょ。そう考えるとき、セックスとか、まずくね？」

女性「え、でも、種は？種の保存とか、したほうがいいんじゃないかな」

男性「もうしてるじゃないか？」

女性「いつ？」

男性「んばかやろー。生徒たちだよ～。」

女性「お、おう」

男性「だから、俺たちが、語るだろ。そしたら、彼らが受け取るだろ。それは、心の中に残るだろ。それを彼らの子供に語るだろ、そうやって、俺らの思いは、保存だれていくんだよ。これってすばらしいことじゃないか～」

女性「お先に帰りまーす」

男性「まってください。なにかぼくまちがったことってますかー」

女性「性欲ってものは君にはないの？」

男性「ああ。視床下部の一部を切除したから」

女性「ないの？性欲？」

男性「あ、うん。」

女性「マジかー、

男性「いや、でも、勃起はするよ！ 精子もでるし。だから、男性的に不能ではな一い」

女性「でも、性欲はない」

男性「そつ。先生としてすべてをコントロールしておきたいわけだよ。完全で理性的な人間としてね」

女性「それはもはや、人間じゃないでしょ」

男性「えっと、ちょっと、難しいことよくわからないんだけど」

女性「まあ、いいや。とりあえず、家に帰ったら、あなたがウソを言っていないか確かめるから」

男性「どういうこと？」

女性「だから、性欲がないけど、男性的に不能ではないってということよ」

男性「ああ、いいよ。」

女性「よし」

男性「え、なにするの・？」

女性「エヘヘッヘヘヘ」

男性「エヘヘっへへっへ！・・・ってなに？」

女性「秘密よ、秘密」



《王子の帰宅》

王子「ただいま」

王様「・・・」

王子「ごめんね。ちょっと遅くなっちゃって。ちょっと手を洗ってくるね」



王様「……」

王子「いや、それにしても、ほんとすばらしい学校だよね。施設も新しいし、先生も優秀な人ばかりで、僕はあんなところで勉強ができて、ほんとに幸せだよ」

王様「そうか、それはよかったよ」

王子「いただきますーす。おいしそー」

王様「……」

王子「一応、友達もできたよー。うん。100人くらい？」

王様「……」

王子「あとね。あの一。うん。学級委員になった」

王様「……」

王子「まあ、ほんとは、文化祭実行委員っていうのもよかったとは思うんだけどね。まあほかになる人がいなくて、しかたなく。えへ」

王様「……」

王子「まあ、でも。クラスの代表だからね。がんばりたいと思うよ」

王子「あと、部活はバスケット部に入って、ポイントガードのポジションを」

王様「あ、もしもし。私だ。」

王子「……」

《女子の帰宅》

女子「ただいまー」

女子「どっかいくの？」

母親「デート」

母親「あ、そうなんだ

母親「あ、お金そこおいておいて」

女子「あ、ごめん。まだ渡すの忘れてた」

母親「ほんとだよ、忘れないでよね」

女子「えっと、いくらだっけ？」

母親「3万」

女子「おーけー。はい。3万」

母親「あと、お味噌、切れてたから買って置いて」

女子「え、そうだった？」

母親「あと、今日。遅くなると思うから」

女子「あ、そっか。じゃあ。夕飯は？」

母親「食べてくる予定」

女子「じゃあ・・・、うん。わかったー」

母親「いってきまーす。」

女子「・・・」

### 3章

---

《子供の独白》

男子、ゲームをいじりながら、女子、本を読みながら

王子「僕には」

女子「私には」

王子「生まれたころから」

女子「お父さんが」

王子「お母さんがいませんでした」

女子「それがどうしてだか」

王子「僕には教えてくれませんでした」

女子「ただ、」

王子「ただ、」

女子「お母さんにとって」

王子「パパにとって」

女子「私が」

王子「望まれて生まれてきたのではない」

女子「ということは確かなことでした」

王子「僕が」

女子「私が」

王子「ほんとに小さかったころ」

女子「よくお母さんに」

王子「パパに」

女子「ゲームをしてもらいました」

王子「そのゲームというのは」

女子「まず、夜の12時に、私は」

王子「僕は」

女子「目隠しをされて」

王子「無菌室という部屋にいれられます。」

女子「車でどこかにつれていかれます」

王子「そして」

女子「1時間か2時間かたって」

王子「トビラが開いて」

女子「車から降りて」

王子「パパは」

女子「お母さんは」

王子「強制という操作をして」

女子「耳元で」

王子「僕を再教育しました」

女子「10秒数えるまで目をあけちゃだめよ」とつぶやきました」

王子「僕は、父によって、再び上書き保存をされ」

女子「言われたとおり、10秒を数えます。」

王子「まあ僕はパパのものだから仕方ないよなあってどこかで開きなおって」

女子「そのうちに、車のエンジンを音が遠ざかっていって」

王子「逆に言えば、こんなできそこないの自分をまっとうな人間にしてくれていることに感謝して」

女子「あたりはどんどんと静かになっていきました」

王子「なるべく嫌われないように生活をしていこうと心がけることにしました」

女子「私は目をあけ、真っ暗な森の中でひとり、空を見上げて立ちすくみました」

王子「でも、やっぱり、僕がいるべき場所はここだから」

女子「私は、家に帰りました」

王子「とさ」

女子「とさ」

王子「めでたし」

女子「めでたし」

### 第三章

#### 《機能の確認》

男性「ね。立つし。出るでしょ」

女性「ほんとね。」

男性「俺はウソつかないから」

女性「んー。まあとりあえず。こいつはいただいておきます」

男性「え、それ、どうする気？」

女性「精子かどうかを確かめるのよ」

男性「精子でしょ、いま、出たんだから」

女性「だから、精子としてちゃんと機能しなかったら、ただの水溶きカタクリコでしょ。」

男性「カタクリコは炭水化物で、精子はタンパク質だけだね」

女性「うるせえ！」

男性「・・・機能するよ」

女性「と、思ってるけど、しないって場合があるんだって」

男性「え、なに。もし、機能してなかったらさ。なに。別れるの？」

女性「そう、なるかもしれないね」

男性「あっそ。そうなんだ」

女性「なによ」

男性「別れたくない」

女性「私だって。別れたくないよ。だから、調べるの。」

男性「わかったよ。疑いとか、そういうの、嫌だから」

女性「あーー。」

男性「どうしたの？」

女性「ほら、私は視床下部とか切除してねえもんで」

男性「あー。浅田クリニックっていうところで、俺はやったよ」

女性「ちゃうわ、ぼけ」

男性「汚い言葉は使わない。」

女性「へいへい」

男性「あ、いけない、生徒に電話するの忘れてた」

女性「あ、私もだ」

《王子と執事》

王子「やぎちゃん」

執事「なんで、ございますか、ぼっちゃん」

王子「俺のいいところってなに？」

執事「いっぱいありますよ」

王子「いってみてよ」

執事「たとえば、ほら、えっと。だから。」

王子「ないのね」

執事「だから、ゲームが得意じゃありませんか」

王子「は？あんなの遊びでしょ。なんの役にもたたないよ」

執事「でも、あの集中力ってのは、すごいと思いますけどねー」

王子「他にやることないだけだよ。僕はソニックみたいにはなれないしね」

執事「ソニックぎヘッジホッグ」

王子「人呼んで「音速ハリネズミ」」

執事「誰にも縛られことはない、」

王子「短気で、きざっぼいところはあるけれど、人を助けずにはいられない」

執事「そんな彼の回りには自然と人、集まるん、ですよね。」

王子「そ。それに比べて、僕はこの大きなお城の中で鎖でがんじがらめになったまだまだ子供な15歳の王子。いつも自分ことばかり考えているから誰も僕の周りにはあつまらない」

執事「え、でも。この児童館の子供たちは、ぼっちゃんのこと大好きじゃないですか」

王子「見てたの？」

執事「はい」

王子「あはは。ちゃんちゃらおかしいや。八木ちゃんには僕と子供たちが遊んでいたように見えたわけ？あれは予行練習だよ。僕が王となって市民を支配下におくデモンストレーションってわけ」

執事「でも、おうまさんごっこのお馬さんになっていたじゃないですか」

王子「は？僕が馬？は？白昼夢でもみてたんじゃないのかい？」

執事「そんなことはありません、とても楽しそうにしていましたよ」

王子「ヤギちゃん。やめて、」

執事「ぱっかぱっかぱっか」

王子「やめて、、やめて」

執事「どうしてでございますか、ぼっちゃんの良いところなんでございますから、もっと自身をもてばよりしいじゃありませんか」

王子「うるさい、黙って。恥ずかしいものは恥ずかしいから。まじで、言ったら殺すからね」

執事「かしこまりました」

王子「ママがいたらなんていってくれたらろー」

執事「んー。それは、やぎにもわかりかねます」

王子「つかえねーなー。」

執事「わからないことは、図書館にいってみるといいですよ」

王子「図書館？」

執事「やぎが博識なのは図書館のお陰ですから」

王子「ふーん。まあそんな博識ではないけどね。」

## 《女子のバイト》

女子「はろー。アジアンさんこんにちは。飛びっこさん、こんにちは。（オナニーして）っていきなりか。。（まってましたー）ありがとう。（いくつなんですか？）16です☆（ピッチぴちですね）そ、ぴちぴちのピッチ（乳首の色は？）ピンク、ピンク。まだ黒ずんでません。（学校にばれたりしないの？）さあどうなんでしょうねー。（性感帯はどこですか？）乳首、乳首。そうですねー。てか、なんでそういう話ばかりなのかなー。（竹島についてどう思いますか）うん。いいんじゃない？（乳輪の大きさ？）そんな興味ある？え、どのくらいだろ半径3cmくらいですかね。ロールキャベツさんこんにちは。（おっきいですね）何が？乳輪？え、みんなどのくらいなんだろう。一般的には「ライオンキングさんこんにちは。（初体験はいつですか？）まだ処女ですー。うそじゃない、嘘じゃない。処女膜みせようか。ゆーちゃんいらっしやーい。（見せてよ）って見せるかぼけ。。（一日、どのくらいイクんですか？）10回くらい？（イクーっていつ）イクー。イクイクイク、イツちゃうー。（声かわいいですね）ありがとー。はい、一筋縄さんこんにちは。（オナニーして）って飛びっこさんそればっかじゃん。（おもちゃある？）使いますか？いいですよー。見ててくださいね。あてまーす。

あああああいくー。

えへへへ。

まーたねー。

うづくまる

ライブチャットは1分150円 工事現場は時給1050円

漫画喫茶は時給850円 ファミマのバイトはから揚げ棒の匂いがとれーない。

ライブチャットでイクイクいってるけどー。私は一度もいったことはない。

いつちゃういつちゃういつちゃう言ってるけど。私は一体どこへ行くーのかー。

バイト～。戦う君の歌を戦わないやつが笑うだろー。

バイト～。冷たい水の中をふるえながら登っていけ。

《先生と母》

先生「あ、もしもし、……」

母「ただいま留守にしています、御用の方はプー。」

先生「あ、あれ？あああ。えっと。わたくし、王立学校の、教諭と申しますが、ちょっとアルバイトの件でお話したいことがありますので、お時間あるときに、お電話していただけたらと思います。失礼しまーす。」

先生「はあ」

《女性と王》

女性「あ、もしもし。」

王様「なんだ」

女性「ワタクシ、王立学校で王子くんの担任をしている教諭と申しますけれど。」

王様「……」

女性「あ、王様でいらっしゃいますか？」

王様「いかにも私が王だが。うちの子がまたなんか悪いことでもしましたか？」

女性「いえ、あのです。今日、放課後に体育の自転車の補講があったんですけど。それに参加せず帰ってしまったもので。どうしたのかなあと思って電話したんですけど」

王様「それは全員参加するものなんですか？」

女性「いえ。授業中に自転車がうまくできなかつた子だけが参加する形になってるんですけど。」

王様「自転車もできないんですか」

女性「そうみたいです」

王様「そうですか。」

女性「そうですね。自転車ができないということになりますと、自己肯定感の関係で、彼の今後の人格形成にも大きくマイナスになってしまいますので」

王様「はい、わかります」

女性「ここはね、親子共々ががんばりどころだと思いますので、是非ご協力のほどをお願いいたします」

王様「家でも、全然話をしないんですよ。」

女性「あー、そうですか。」

王様「ええ。ほんとに、わからないんですよ。まったく。もともとは私の体の一部であったはずなんですがね、どうして言うことを聞かないのか。なぜこうもわからないのか。と。ほんとに。先生はお子さんは？」

女性「いえ、結婚もまだなもので」

王様「そうですか。先生もそのうちわかりますよ。」

女性「そうですよね。」

女性「王子くんはいま家にいらっしゃいますか？」

王様「どうでしょう。最近、帰りが遅くて、まったく何をしているのやら」

女性「そうですか。」

王様「学校ではどうなんでしょうか。何か悪いことしてませんか」

女性「いえ、そんなことはありませんよ。」

王様「そうですか。この件につきましては私からもよく言っておきます」

女性「よろしくおねがします」

《図書館》



カラコロン、王子が入ってくる

王子「あの」

司書「・・・」

王子「すいません、あの、本を探しているんですけど」

司書「あ、ちょっと待っててね。」

王子「はい。」

司書、忙しくしてる。

王子「何をしてるんですか」

司書「新しく入ってきた本を棚にのける作業です」

王子「へー。これだけ本があるのに、まだ新しい本が入ってくるんだね。」

司書「はい。世界は未だ謎に包まれていますからねー」

王子「なるほど。」

司書「よし」

司書、座って本を見始める

王子「あの。ちょっと」

司書「え？なんですか？」

王子「あの。だから、僕。図書館とか初めてで、どこに何があるかよくわからなくて」

司書「図書館では本は分類コードで分類されていて。010～019は図書館について、110～119は哲学についてみたい。そうやって人間の考える思考の全てにナンバーをつけています。牧場の牛、まさに君、みたいにね。だからこの図書館の中には、人間の思考のほとんどすべてが含まれているの。たとえば、あなたが今、悩んでいることもね」

王子「そうなんだ」

司書「なにを探しにきたんですか？」

王子「ああ。えっと。あの。はい。だから、お母さんってなんなんですか」

司書「あーあ・・・分類コード370教育学の棚では、「母性的な愛とは、善悪の分け隔てなくすべてを包み込む愛だ」といっています。

王子「ふーん。そっか。じゃあさ。母性的な愛をうけてこなかった人間っていうのは、  
一体どんな人間になってしまうんでしょうか」

司書「基本的には、自己肯定感というものが不足した状態の子供が生まれてきます。」

王子「自己肯定感？」

司書「あなたは、自己という、国の中に住んでいます。」

司書「もしも、その国のことを、「まあ悪くない」と認識することができなければ、あなたはその国に住み続けることができなくなります。この「まあ悪くない」という感情が自己肯定感あり、その国のルールです。」

王子「価値観みたいなもんだね」

司書「そうです」

王子「え、そのルールはどうやって形成されるの」

司書「父親によって定められます。もし、あなたがそのルールに従うことができなければ、あなたはその国から追い出されてしまいます。」

王子「戻ってくることはできないの」

司書「もし、母親がいれば、裏門からあなたを密かに入れてくれます。」

王子「母親がいなければ？」

司書「戻れません。あなたは一生、一人孤独に生活をしなければなりません」

王子「でもさ、そのルールが気に入らなかったら、僕は一生、嫌々ながらそのルールに従って、その国で生活をしなければいけないってことだよ」

司書「ルールは変えることができます」

王子「どうやるの」

司書「殺すんです。父親を。」

王子「・・・それは、実際的な意味で？」

司書「もちろん観念的な意味です」

王子「そっか。よかった。」

司書「でも、パパを悲しませたくない？」

王子「そうね」

司書「それも、組見込まれたものです。父親は「褒める、叱る」という行動をすることによって、子供にとっては、愛されたい、感情をプログラミングします。」

王子「なるほど」

司書「でも。これは全て一般論です」

司書「私はもともと奴隷でしたので、物心ついたころから父と母はいませんでした。」

王子「そっか」

司書「それでも、まあ。普通っぽい人間に見えるでしょ？」

王子「たしかに」

司書「そういうことです。」

電話が鳴る。

王子「パパだ、ごめん。また来るね」

司書「いつでも、お待ちしております」

王子「あのさ。司書さんってもしかして、兄弟いる？」

司書「あー。三人兄弟です」

王子「その一人って門番さん？」

司書「そうです。もう一人はケバブです」

王子「ああ、すっきりした。ありがとうございます。じゃ！ あ、（女子とぶつかりそうになる）」

女子「あ。」

王子「どうも」

〔王子はける〕

司書「知り合い？」

女子「いや」

司書「え。でも。なんかいいんじゃない？」

女子「え、なにが？」

司書「つきあっちゃえば」

女子「つままない冗談はやめてください」

司書「あっそ。つままないね」

女子「なに話してたの？」

司書「司書は利用者の個人情報について適切に管理しなければいけません」

女子「なにそれ」

司書「どうしたの？」

女子「休憩」

司書「あっそ」

女子「私はいまどんな本を読んだらいいんだろーか」

司書「そうですねー。それはわかりかねますねー。」

女子「お父さんがいたら何かかわったのだからーか」

司書「いつか、父さんみたいに♪」

女子「そういうのいいから」

## 4章

---

《過去の回想》

王子「ねえ。パパ」

王様「なんだ」

王子「おねだり するのってなんでいけないことなの？」

王様「それはね。自分の欲しいものを手に入れるため、人のお金を使いたっていうゲスな考えを主張することだからだよ」

王子「え、でも。どうせプレゼントもらうんなら欲しいものもいいじゃん

王様、投げる

王子「そうか、なーるほどねー」

王子「ねえパパ」

王様「なんだ」

王子「さぼる ことってなんでいけないの？」

王様「それはね。本当にやるべきことがわかっているのに、自分勝手な理由で全力を出し切らず、本来あるべき自分や他人の利益を奪うことになるからだよ」

王子「え、でも。たまには息抜きっていうのも

王様、投げる

王子「そうか、なるほどねー」

王子「ねえ。パパ」

王様「なんだ」

王子「殺すことってなんでいけないんだろう」

王様「それはね。本来もっている喜びとか希望とか可能性とかを根本的に奪うことだからだよ」

王子「でも、死んだほうがいいやつってのも中にはいるんじゃないか」

王様、投げる。

王子「そっか、なーるほどねー」

王子「ねえパパ。」

王様「なんだ」

王子「パパはどうしていつも正しい答えを教えてくれるの？」

王様「パパが教えたことが正しいことだからだよ」

王子「なーるほどねー」

王子「え、っていうことは、本当は正しくないっていうこともあるってこと？」

王様「いまなんていった？」

王子「いや、え？」

王様「なんていった？」

王子「いや、うそ、うそ、うそだよ、ごめん！ごめん！」

《王と王子》

王子「はあはあ」

王様「・・・」

王子「ただいま」

王様「その息切れは本当か？」

王子「・・・」

王様「本当か？嘘か、本当か」

執事「・・・やだなあ、ぼっちゃまがウソなんかつくはずないじゃありませんか、ねえ。ぼっちゃま」

王子「嘘です。すみません」

執事「嘘だそうです」

王様「八木」

執事「はい」

王様「椅子になれ」

執事「はい」

王様「座れ」

王子、椅子に座る

王様「・・・どうだ。最近、学校のほうは」

王子「あ、うん。まあまあだね」

王様「そうか。まあまあか。なあ。まあまあな」

王子「そうそう、この間、クラスの友達がサプライズパーティーをしてくれたんだよ」

王様「そうなのか。それはよかったな」

王子「うん。もう、ほんと。びっくりしちやった。」

王様「さっき、先生から電話があつてな」

王子「え・・・なんて」

王様「なんだと思う？」

王子「なんだろう。ああ。学級委員の僕にクラスの状況を聞きたいのかな」

王様「なあ」

王子「・・・え・・・なに・・・補習のこと？」

王様「はあ」

王子「いや、・・・その・・・今日はちょっと用事があつて」

王様「用事ってなんだ。」

王子「だから」

王様「だから、なんだ」

王子「できないから」

王様「それは、誰が聞いても納得する理由なのか」

王子「ちがいます」

王様「何が正しいかということは分かるよな」

王子「はい、僕は補習に参加するべきでした」

王様「できないからやるんだよな」

王子「はい」

王様「・・・自転車もできないらしいな」

王子「はい。」

王様「はい。っってお前。自転車って。普通、小学でも。おい！どこかまでがっかりさせてくれるんだよ」

王子「ごめんなさい」

王様「他にいるのか。自転車に乗れない奴は」

王子「いません」

王様「そうか」

王子「次、がんばります」

王様「どのくらいがんばるんだ？」

王子「だから、勉強以外のすべての時間を自転車に費やすよ」

王様「そうだよな。そうすべきだよな」

王子「はい。そうします。努力が足りませんでした」

王様「そうなんだよ。努力が足りないんだよ。やればできるんだよ。大抵のことは」

王子「はい。すいませんでした」

王様「ここにお前の好きなゲームがある。」

王子「はい」

王様「どうしたらいいだろうか」

王子「えっと。はい。えっと。ちょっと、あ。お腹が、イタタタ・・・」

王様「その腹痛は本当か、本当かウソか、本当か」

王子「嘘です」

王様「お前は、今、約束をしたんだからな」

王子「はい。約束をしました。」

王様「なんて約束をしたんだ」

王子「えっと。すみません。よく、わかりません」

王様「どのくらいがんばるんだっけ？」

王子「勉強以外のすべての時間を自転車に費やします」

王様「約束を守らないやつなんだっけか」

王子「うそつきです」

王様「うそつきはなんだっけ」

王子「うそつきは泥棒の始まりです」

王様「泥棒はなんだっけ」

王子「犯罪者です。うちの子じゃありません。国外追放島流し、死すべき存在です」

王様「じゃあ、これはもういらないよな。」

王子「はい」

王子「そして、また、新たなルールが生まれました」



《誘いを断る王子》

生徒「王子くん」

王子「なに」

生徒「こんどの金曜日、体育祭の打ち上げがあるんだけど」

王子「あ、今日ごめん、ちょっと。家の仕事を頼まれてて」

生徒「王子くん」

王子「なに」

生徒「今度、みんなでカラオケいこうかって言ってるんだけど」

王子「あ、僕、実は喉の病気でお医者さんにこれ以上歌うなって言われてるんだ」

生徒「王子くん」

王子「なに」

生徒「放課後、ちょっと、話したいことがあるんだけど」

王子「あ、ちょっと。今日は雨が降るまえに帰りたいんだ」

生徒「王子くん」

王子「なに」

生徒「クラスで飼ってたカメが死んじゃったから、みんなで埋めに行こうっていう話なんだけど」

王子「ああ。僕、宗教上の関係でダメなんだよね」

生徒「王子くん」

王子「みなさん、ごめんなさい。これは、ルール、ルール、ルール、ルールなんです。」

王子「僕の、すべての時間は、自転車に費やさなければいけないんです」

生徒「王子くん」

王子「なに？」

生徒「ねえ。知ってる？こんどの東京ゲームショウで、メガドライブが復活するんだって」

王子「え、うそ。メガドライブって、ソニックザヘッジホッグがはじめて登場した。あのメガドライブ？」

生徒「そうそう。」

王子「まじか」

生徒「でね。ほら、児童館の子供たちゲーム好きじゃん。だから、来週の日曜日に東京ゲームショウにつれて行ってあげようかなって思ってる」

王子「なんて最高の企画なんだ。」

生徒「あ、でも。忙しいよね」

王子「いや、ちょっと待って。うん。えっと。パパに相談してみる」

生徒「パパって？」

生徒「え、うそ。高校生なのにパパって言ってるの？」

生徒「まじか、すごえ。逆にすごえ」

生徒「絶滅危惧種じゃんね」

生徒「いやいや、ないでしょー」

生徒「パパって。パパって。パパって」

王子「だから、お父さんに、、、相談してみるよ」

《女子の家の庭》

女子「ただいまー。なにしてるの？」

母親「掃除とたき火」

女子「あ、へえ。」

母親「焼き芋食べたいなあって思っ」

女子「あ、いいね。」

母親「でも、お芋がなくてね。砂肝一。代わりに焼いてるの」

女子「あーそうなんだ。え、ちょっと待って。何焼いてるの？」

母親「だから、砂肝よ。」

女子「じゃ、なくて。これ、アタシの本でしょ」

母親「そうだけど」

女子「そうだけどじゃなくて」

母親「だから、掃除もかねてって言ってるじゃないの」

女子「え、なんでそういうことするの？え？ちょっと？だって、これ、私が大切にしてた本なんだよ。

家にずっと置いておきたいと思ったから買った本なんだよ」

母親「あんたが、本ばかり読んで楽しそうにしてるからよ」

女子「よくわからないんだけど」

母親「現実はあるあなたが大好きな本なんかと違うんだよ」

女子「そんなのわかってるよ、だから、本なんですよ。ねえ。なにからなにまでさ～本まで奪わないでよ。」

母親「気持ち悪いわね。へらへらしてるんじゃないわよ」

女子「え？私、今、へらへらしてる？おかしいな。怒ってるんだけどな。ああもう。むかつく一。殺したい。殺したい。殺した。ああ、だめだ～ダメだ。何小さいこと考えてるんだろ～私～。もっと、寛大な心をもたないといけないのに、ああ、くそ～むかつくなあ。むかついちゃうなあ。」

女子「ねえ。お母さん。」

母親「なによ」

女子「なんでもないw」

女子、母のライターを手にしてポツケに入れる。

《作戦会議①》

王子「んああ！！！！！！・・・」

王子、暴れる

王子「ママ、ママ」

執事「ぼっちゃん、ぼっちゃん」

乳首を出す

王子「ママー。あぁっあぁ！。ガブ！ ペっ！まず！にが！」

と乳首を投げる

執事「乳首がー」

王子「ふっ」

執事「少しは落ち着きましたかぼっちゃん」

王子「ぜんぜん。逆にむかむかしてるよ。あーもう。八木ちゃんはこういうときどうしてるの？」

執事「こういう場合ていうのは？」

王子「だから、どうにもこうにもムカムカするときだよ」

執事「あー。私の場合は。女を抱くか、お酒を飲むか、これですね。携帯乳首」

王子「タバコじゃん！え、八木ちゃんタバコ吸うの？」

執事「それはまあ。八木も色々溜まっておりますので」

王子「へえそうなんだ。え、ちょっと貸して。わぁ！かっこいい！」

執事「吸ってみますか？」

王子「え、いいよ。パパに怒られちゃうし。」

執事「でた、また、パパ、パパ」

王子「なんだよ。」

執事「たまには、パパを困らせてみるのも手かもしれませんよ

王子「そっか。なるほどね」

【音楽～最近～】

《作戦会議②》

女子「ひとを殺すことっていうことは操作としては、意外に簡単で」

〔先生とケバブ入ってくる〕

ケバ「ケバブーいらんかね」

〔先生は机間巡視している〕

女子「たとえば、階段をのぼっているときに、前の人の洋服の裾をちょっとひっぱったり、ホームで電車を待っているときに、ポンと背中を押したら、簡単に人なんか殺せちゃうんだよ。ほんとに、小さな力で、ちょっとしたタイミングで、ポンってね。そのことをみんなわかっていないんだよね。みんな油断しすぎなんだよな。信用しすぎ。もっとちゃんと、危機感をもって生きていかないと、だめだよ。どこに敵がいるかなんてわからないんだらね。ほら、そんな幸せそうな顔してたら、もう。殺しちゃうぞ」

《悪事》

男性「はい、没収」

ケバ「おいしいよ」

女子「ちょっと待ってよ。」

男性「ダメです」

女子「あたしのでしょ。なんであんたにとられなきゃいけないの」

男性「だから、授業中に携帯を使っていたら、没収するっていうルールは前々から言っていたはずですよ」

女子「ルールってなんだよ、そんなルールに従うなって宣言した覚えはないんだけど」

男性「この学校にいるからには、この学校のルールに従わなきゃいけないんだよ」

女子「わかった、じゃあ。とりあえず、電源だけ、落とさせて。」

男性「え、あ、うん」

女子、携帯を男性から取り返す

男性「おい！！！」

女子「なんだよ。あたしのだろ、あたしのものをあたしが返してもらって何がいけないんだよ」

男性「違うだろ、それは、嘘、だろ、なに、うそついてんだよ。出せ！出せ！」

女子「やだ！」



男性「おい！なあ、どうしお前だけルールに従わなくていいんだよ。みんな従ってるんだよ。そんなのみんなが納得いかないだろ。なあ。前もっていついたルールを破ったお前がいけないだろ。」

女子「じゃあ、やめる。学校やめるから」

男性「ちょっとまって。」

女子「あーめんどくさいな、ほんと憎たらしい、ほんといらいらする」

男性「出せ、早く出せよ。出せ出せ出せ出せ出せ出せ」

女子「あー、もう！めんどくさいな！！！！」

女子はシャーペンを男性の目に突き刺す

王子はケバブを盗む

男性「うああー！目が！！！」

ケバ「What's happn!!! Oh!My KEBABU !God !Oh!No! Hally! Peple! Peple! parple!」

男性「大丈夫だ、男性は大丈夫だ。みんなー。これは男性が事故だ、そうなん。そうだよな。ああーこれがお前の痛みか。」

女子「男性、私、男性。男性、ごめんなさい。男性。私！」

男性「ああー！目が！」

《三者面談①》

男性「というまあそういう感じでした。ええ」

母親「はい。」

男性「ああまあ。いえ。まあ。私も少し大きな声をあげてしまったもので、火に油を注いってしまったようなところもあり、いえ、でも。まあルールはルールですから。すいません」

母親「目は大丈夫だったんですか？」

男性「あ、ああ。これは、危ないところで急所をはずしまして、先ほどの彼女に危機感というものを教えるための演技ですから。はは。大丈夫です。」

母親「・・・それで、謹慎処分とかになるのでしょうか？」

男性「いえ、まあ今回はとりあず、僕も悪かったところがありましたので、喧嘩両成敗で、お咎めなしということで。はい。」

母親「そういうのはちゃんとやったほうがいいんじゃないでしょうか？」

男性「いえ。でも。まあ。」

母親「学校がそうだから、家でもワガママばかりいうんですよ」

男性「あはあ・・・」

母親「だからね。結局は人間っていったって動物なんだから。言葉の通じない動物たちがどうやって、子供を教育して

るかって、それは叩くことでしょう。ね。一緒。本当に分かるためには、痛いって思わせる罰を与えないといけないんですよ。ね。「ああこんなことしたら痛いことになるんだな」って、そういうことを実際的に学習させていかなければいけないと思いませんか？」

男性「じゃあまあ検討させていただきます」

母親「検討してください」

男性「はい。じゃあ、まあ今日はこの辺でということで」

### 《三者面談②》

王様「それは本当ですか？」

女性「はい。私自身かまさか王子くんがと思っているのですが、本人が事実をみとめているもので」

王様「そうなのか」

王子「はい。すいませんでした。」

王様「えっとこちらの方は？」

女性「王子くんが食い逃げをしたケバブ屋の店主です。」

王様「うちのバカ息子が本当に申し訳ありませんでした」

ケバ「あ、いいのいいの。あれでしょ。青少年特有のね。（歌）」

女性「結論から申しますと今回、初犯だったということと、お店の方とも示談が成立しましたので、今回の件はおとがめなしということですので」

王様「ほんとうに申し訳ありませんでした。」

女性「学校の方でも、学校外で起きたことですので。特に特別指導の方はないのですが。」

王様「はい」

女性「ご家庭で今回のことについてよく話し合っただけならと思います」

王様「本当にすいませんでした」

【音楽～SE～】

《車の中》

女子は目隠しをされ、手も縛られている。

女子「……」

母親「……」

女子「あー。なんかお腹すいちゃったなあ。なんかどっか寄っていかない？ガストとか、デニーズとか」

母親「……」

女子「あー。お金のことはだいじょーぶ。給料降りたばかりだから。」

母親「……」

女子「え、なに？なに？この空気。ちょっとやめてよ。前にもあったじゃん。こういうこと」

母親「……」

女子「ちょっと。無理、無理。この空気。無理なんだけど。え、ちょっと。窓あけていい？」

母親「……」

女子「あれ、あ、ちょっと。あけられないなー。あ、あけられまついたー。涼しい。風、きもちいいね」

母親「……」

女子「あれー？もしかして、これ、マイナスイオン？あらららぁ。そっかー森かー」

母親「……」

女子「あ、そっか。もしかして。えー。いきなりかー。ちょっとー。着替えとかもってきてないんだけどー。あ、ヒントはヒントどっち方面？北？南？……ってシカトかい！はははー。ひさしぶりだなー。よーし。気合いれてがんばりましょー」

《車の中》

王子「……」

王様「……」

王子「ごめんなさい……つい。魔がさしてしまったというか。なんというか。……別にほしいわけじゃなかったんだけど。……自分でもよくわからなくて。こういうのってなんなのかな？」

王様「なんだ？じゃあこれは。親に対するさりげないSOS なのか。言いようのない反抗心なのか。幼児期に消化しきれなかった甘えなのか。」

王子「どうなのかな」

王様「ごめんなあ。お前のご事情全然わかってやれなくて、ほんとにほんとに今までごめんなーとでも言うと思ったか。やめてくれよ、そんなカスみたいな言い訳」

王子「……」

王様「お前は一生消すことのできない過ちを犯したんだよ。」

王子「……」

王様「何かを言い訳にすれば自分の行為がなんでも正当化できるという考えは、社会的不適合者の考えだ。私のいままでの躰の結果として、そのような社会的不適合者をこの世に排出してしまったことに対する責任は私にある。なので私が責任をもって、お前を処理しなければいけない」

王子「……」

王様「やぎ。」

執事「はい」

王様「無菌室の準備をしろ。」

執事「無菌室でございますか……」

王子「お腹いたいいたいいたい……」

執事「かしこまりました」

王様「心配することはない。また、はじめからやりなおせばいいんから、な」

【音楽～罰～in】

《無菌室と森》

王子「ひとつ目、ひとを不幸にしないこと

まああたりまえなんですけど。ものをとったり、誰かの悪口をいったり、暴力を加えたり、人を人として思わないように扱ったり、授業中大きな声でおしゃべりをしたり、そういうことは人の幸せを奪うことです。そんなのは奴隷と同じです。最低のことです。やめてください。

女子「ふつつ目、自分を粗末にしないこと。

授業中に寝ていても、漫画を読んでも、音楽を聴いていても誰も不幸にはしていません。

自分を自分でせめることも、自分をおとしめることも、誰も不幸にはしていません。

でも、それは自分を粗末にするということです。それは、もったいない。一生懸命、幸せになろうとしていきましょう。

王子「みつつ目、奴隷に優しくすること

奴隷を傷つけたり、奴隷のものをとったりしても、誰も不幸にはしていません

けれども、奴隷がいなければ、この社会がなりたないことも事実です。

ですから、モノを大切にするように、奴隷にも優しくしてあげてください。

女子「よつつ目、

王子「ルール」

女子「に従うこと。髪を染めることや、ピアスをつけることは、自分も人も奴隷も不幸にしているかもしれません。でも、

王子「ルール」

女子「は」

王子「ルール」

女子「です。その」

王子「ルール」

女子「にはその」

王子「ルール」

女子「の意味があります。その」

王子「ルール」

女子「があるからこそ、自制を保ち、みんなが幸せに暮らしていくことができます。でも、」

王子「ルール」

女子「を変えることなく、」

王子「ルール」

女子「を破ることは、みんなが納得いきません。ずるです。みんなの幸せをうばうことになりかねません。ですから」

王子「ルール」

女子「は」

王子「ルール。ルールはルールル、ルールル、ルールル・・・♪

女子「ルール。ルールはルールル、ルールル、ルールル・・・♪

【音楽～罰～out】



## 5章

---

《先生たち》

女性「ねえ。どうしよう。王子くんが学校に来ないんだけど」

男性「こっちも一人女子が無断で休んでるよ」

女性「あと」

男性「一応しておいた方がいいんじゃない？」

女性「うん、でね。」

男性「俺は家庭訪問してみるけど」

女性「あのさ。」

男性「これがおれの理想とする完全で理性的な人間ってやつ」

女性「おえ！！！」

男性「うん。こうやって種が保存されていくわけだよ」

女性「おえ！」

男性「なんだよ」

女性「種の保存したっぼー！」

男性「ええ、え。マジリアルガチ？」

女性「うん。生まれそう。」

男性「まじか。たんま、たんま。えっと」

女性「頭、出てる。頭出てる。」

男性「まって。ちょっと、待って」

女性「あ、おっけ。引っ込んだわ。」

男性「え、あ。よかったー。」

女性「あぶねー。」

男性「え。なに。できてたの？」

女性「うん。この間、採取した精子を面貌でぐりぐりってやって遊んでたら、面貌ベイビー」

男性「言えよ。」

女性「ごめん」

男性「あと、俺。ほんと、子供とか、マジ無理だからね」

女性「え、うそ。この時点で？」

男性「うん。だって。子供。愛せてないでしょ。実際」

女性「あー。たしかにー。目からうろこー」

男性「だから、産まないほうがいいんだって。生まれてくる子供のためにも」

女性「なるほどね」

《女性と門番》

女性「あの。」

門番「あ、はい。ああなんだ？てめえ？ああ！？」

女性「えーーーーー。」

門番「なんですか？」

女性「あの。わたし、王子くんの担任の教諭と申しますけれども」

門番「あぼっちゃんの先生、どうも。うちのぼっちゃんが、いつもお世話になっております」

女性「いえ、いえ。こちらこそ。どうも。」

門番「あ、お綺麗ですね」

女性「あ、どうも」

門番「あ、いい天気ですね」

女性「そうですね」

門番「えっと。今日は僕にプロポーズかなにかですか」

女性「いえ、違います」

門番「ああなるほど。では、何しにきたんですか」

女性「あ、はい、あの、ちょっと。最近、王子くんが不登校気味でしたので。気になりまして。家庭訪問にきた次第であります。」

門番「ああそうなんです。で？」

女性「あ、中入ってもいいですか？」

門番「ん、いや、だから。ちょっと待ってくださいね。いま、ちょっと。上のものに確認とりますのです」

女性「あっはい。すいません。お手数かけます」

門番「大きな敷地でしょー」

女性「そうですね」

門番「ほとんど樹海みたいな感じなだけどね」

女性「へえそうなんです」

門番「まだ。未開の地もあるらしいよ」

女性「へえ。なるほど」

門番「あ。はい。はい。あ、わかりましたー。はい。あ、おっけーです」

女性「あ、じゃ失礼しまーす。」

門番「あのさ」

女性「はい」

門番「家まで結構あるけど大丈夫かな」

女性「え、そうなんです。どのくらいかかりますか？」

門番「馬を使っても二日はかかりますかね」

女性「あーなるほど。馬は？」

門番「ないですね。」

女性「え、いつも王子くんは」

門番「あー。徒歩で30分の秘密のルートがそこを曲がった角のところにあるんですけど。いや、あの、すいません。

そのルートはちょっと、さすがに、王子様のお友達でも、一般の方ということになってしまうので、はい、ごめんなさい」

女性「ああ。地図とかあったりしますかね。」

門番「地図？」

女性「の、マップ的なあれ。」

門番「ああマップ的なあれですね。えっとー。ちょっと待ってくださいね。探してみますわ」

女性「なさそうですかね？」

門番「ちょっと、待ってくださいね。あれー。こちら辺にあったはずなんだけどな」

女性「うわー。めちゃくちゃ散らかってますね。」

門番「はは。うるせえ。ええ。なんか、はい。収集付かなくなっちゃって」

女性「絶対O型ですよ」

門番「え、なんでわかったんですか」

女性「わかりやすすぎですよ」

門番「運命ってこわいわー」

女性「少しは片付けたほうがいいですよ」

門番「ええでも。片づけても散らかるじゃないですか」

女性「まあそうですけど」

門番「ある意味、これ以上散らからないっていう意味で安定してるんですよ。」

女性「え、でも。不便ですよ」

門番「俺の中で、全部、わかってるんで」

女性「でも。いま、実際わからなくなってるじゃないですか。。」

門番「ああ。ない。消えた。また怪奇現象だ、くそ、妖怪モノカクシめが」

女性「え、妖怪モノカクシってなんですか？」

門番「はい！ 仕方ない！。・・・案内しますよ。」

女性「え、だって。門は？」

門番「あぁいいんす。いいす。ちよとくらい。」

女性「え、じゃ、なんでさっき上のものに確認とったんですか？」

門番「モーション。モーション。大事でしょ、そういうの」

女性「あーそうなんだ」

門番「ゆきましよう！」

女性「はい」

門番「あ・・・、ちょっと。その格好じゃあ。まずいかな？」

女性「え？」

《女子の家①》

男性「ぴんぽーん。ぴんぽんぴんぽんぴん、ぴんぽん。ぴんぽんぽんぽん・・・♪」

母親「あのうるさいんでやめてもらっていいですか？」

男性「どうもー。こんにちわ」

母親「新聞なら結構ですんで」

男性「いえ、あの」

母親「テレビもみていませんので」

男性「あの、わたくし、王立学校で教諭をしております教諭といたします」

母親「・・・」

男性「あ、どうもすいません」

母親「どこかでお会いしましたっけ」

男性「あ、はい。先日娘さんに目を疲れた」

母親「あー。えっと取り立て？」

男性「いえ、ちょっとお話をしたいことがありまして、中入ってもよろしいでしょうか」

母親「かまいませんよ」

男性「では、失礼します。うわ、くさ。え、汚な、え、くさ。あ。じゃあ、ここへんで」

母親「どうぞ」

男性「失礼します」

《門番と女性②》

門番「てい！あぶない。」

魔子「ギャー」

女性「ええ。超かわいいじゃないですか、私イグアナとか大好きなんですよ」

門番「甘くみてはいけない、かわいい顔して、どんな猛毒をもっているかわかったもんじゃない」

女性「まじかー」

門番「ふん！」

魔親「あギャー！」

門番「よし。こちらへんでキャンプを張りましょう」

門番は魚を焼いている。

門番「いやー。やっぱり先は長いですねー」

女性「まさか、家庭訪問の途中でキャンプをするとは思っていませんでしたよ」

門番「そうですか。でも、いいですよ。キャンプって。野生に帰る感じがね、普段使っていない感覚が研ぎ澄まされるっていうかねー。」

女性「あ、ああ」

門番「目を閉じると、うん、まあ。・・・焼けたかな、あ、もういい感じ、いい感じ。はい。どうぞ」

女性「え、あ、いいんですか」

門番「食って、食って。お腹すいたでしょ」

女性「あ、そうですね」

門番「ね。食べな。先は長いんだから」

女性「じゃあ。いただきます。」

門番「・・・おいしい？」

女性「はい、とても」

門番「それは、よかった」

女性「門番の仕事は長いんですか？」

門番「ああ、まあそうね」

女性「へえ。そうなんですか」

門番「20年。だねー。」

女性「20年！？え、って。おいくつなんですか？」

門番「32歳」

執事「え、じゃあ。12歳のときから。え、そうなんですかねー。」

門番「あー。僕、もともと少年奴隷だったんですよ」

女性「あ、、、。そうなんですかね。」

門番「あ、引きました？いや、いいんです。いいんです。よくひかれるんで？」

女性「いえ。ひかないです。先生なんで」

門番「偽善者」

女性「・・・門番さんはいつまで奴隷だったんですか？」

門番「僕ら兄弟3人はが連れてこられた家では、私たちを含む10人の奴隷が働いていました。みんな10代以下の子供たちでした。扱いとしては、本当にひどいものでした。基本的に服を着ることもゆるされませんでしたし、わずかな食事と睡眠と過酷な労働。」

門番「おら！働け！こら！」

門番「う！はい！」

門番「ほら！もっと働け！」

門番「はい！あう！」

門番「・・・私達10人にはそれぞれの役割が与えられていました。あるものは、食事とつくり、あるものを掃除をし、あるものは農作持つを作る。その労働のひとつには、性的な労働も含まれていました。まあその主人が変態だったというわけですよね。でも、その主人は世のなかでは、非常にまともな人間として認められていました。つまりは、私達は彼にとっての汚い部分を引き受ける便所だったというわけです。必要不可欠な存在だったんです。結局、私が連れてこられたときの10人のうち、10歳を迎えられたのは私たち兄弟だけでした。」

女性「そうだったんですね」

門番「はい」

女性「どうして門番さんたちは生き残ることができたんですか」

門番「かわいがられていたからです。あー。そういう意味ではなくて。歌うまかったんですね。」

女性「なるほど。歌が門番さんを救ってくれたんですね」

門番「え、聞きますか」

女性「え？あ、じゃあ」

門番「やめておきましょう」

女性「いや、いいですよ。歌ってください」

門番「しかたないなー。」

門番「あ、ああ。ん。ああ。あ」

♪愛の代替案

「言いたかったけど、言えなかった。

みんなもってて、もってなかった。

ほしかったのに、もらえなかった。

もらっていたのに、なくなった。

いまさらになって思い返して、取り返してたくて、補いたくて。

惹かれあって、求め合って、凸と凹を埋め合うんです。

過度な愛と過疎な愛を与えたのはだれです。

デコとボコを複雑化したのは紛れも無く貴方たちです。

会いたかった、会いたかった、会いたかった、イエス

あ、痛たった、あ、痛たった、愛、痛たった、イエス 君に一。」

女性「それで、どうやって、門番さんは、解放されたんですか」

門番「火をつけたんですよ。その家に。15歳のときです。それで、僕は、そのときに脱走したんです」

女性「よかったですね」

門番「そうですね。でも、今も、奴隷制度は続いていますからね。」

女性「需要と供給が存在するっていうことですね。」

門番「貧しくて不必要になった子供と、膨れ上がった欲望の管理をする上で必要になった奴隷」

女性「すべては身勝手な大人のせいなんですよ」

門番「さあ。もう寝ましょう。明日5時におきれば、夕方くらいには到着しますから」

女性「5時おきですか」

門番「寝坊しないように」

女性「はい、おやすみなさい」

門番「あの、よかったら一緒に寝ますか。」

女性「あーあ」

門番「・・・やめておきましょう。ここで体力を使うわけにはいかないからね。」

門番「おやすみなさい」

《女子の家②》

男性「えっと、ですね。最近、あの、娘さんが学校を休んでいることについてはご存じでしょうか」

母親「あ、はい。存じております」

男性「ああ、そうなんです。それはよかったです。家は出ているのに、学校には来ていないというのが一番怖いですからね、あ、それはよかったです。ほんとに。」

母親「・・・」

男性「えっと。ちなみに、今、娘さんはどちらにいらっしゃいますでしょうか？」

母親「あー。えっと。北の方ですね」

男性「えっと。あの・・・北っていうと。また広いですよ。範囲が」

母親「おもしろいですね。先生」

男性「あ？ああ。そうですか。いえ。どうも。」

母親「芸人さんにでもなれるんじゃないですか？」

男性「え、そうですか。あは。そんなこと言われたことないな。え、出てみようかな」

母親「面白い」

男性「いや。えっと。すみません。わたくし、すぐ脱線をしてしまうたちでありまして。いや、あの。え？えーと、何しに、彼女は、その、北の方に行っているのでしょうか。」

母親「何しに？っていうと、それは？」

男性「いえ、ですから、たとえばですけども。自分探しとかそういう類のものなんでしょうかね？」

母親「あー、自分探し？ある意味そういうことになりますかね」

男性「あー。なるほど。そうですか、いえ、実は私も高校の頃に、自転車で日本を縦断したタイプの人間ですから、気持ちはわからなくてもいいのですよ、学生時代には青年海外協力隊なんかも行きましたね。ええ。」

母親「あーそうなんですかー」

男性「私、何か検討違いのことを・・・？」

母親「あの子の場合はそういうのではなくて、」

男性「と、いいます。」

母親「はい、あの、私がね。連れていったんですよ、北の、森の、奥深くに」

男性「あー。そうなんです。お母さまが？娘さん。を北。えっと、それは、なんのために？」

母親「ですから、教育のためですかね？」

男性「教育っていうと？」

母親「ですから、ついてくるかついてこないかっていう話じゃないですか。

母親「それをね、改めて考えてもらいたいってことなんです。野生のね、森の中で、一人でね」

母親「私としては別にどっちだっていいんですから」

母親「まあ。なんていうんでしょうか。仕方ないとは思いますが。」

男性「仕方ないというのは」

母親「子供ってすごく敏感でしょう？ほら、大人が本当はどう思っているのかってことに対して」

男性「わかります。私も常に。そのことは感じています」

母親「だから、あの子もきつとわかってるんでしょうね。私が、彼女のことを、愛していないということが」

男性「ちょっとよくわからないのですが」

母親「先生は、お子さんは？」

男性「いえ。まだ。」

母親「だったら、お分かりにならないと思うわ。親の気持ちっていうものを。」

《王子の家》

門番「到着しました」

女性「お、ここか。でか！でかいなー。」

門番「まあお城ですから」

女性「えっと、もうここ入れればいいんですか」

門番「はい。こう。」

女性「あ、こう？」

門番「あ、そうですね。そんな感じです。すごい」

女性「あ、そうですか。あははは」

門番「なんだか、名残りおいしいですね」

女性「ああ。まあそうですね」

門番「あなたと会えたこと一生忘れません」

女性「まじか」

門番「マジです」

女性「おおじゃいってきます」

門番「あのさ。」

女性「はい。」

門番「僕が案内したってことは内緒で」

女性「おっけー。任せておいて」

門番「ぼっちゃんをよろしくおねがいします」

女性「はい」

門番「君ならできる！」

女性「おっけーです」

女性「よっし。（ドアを開ける）こんにちわー。こんにちわー」

王様「ああ・・・先生ですか。それはそれは遠いところから、よくここまで辿りつきましたね」

女性「ああ。門番さんが案内してくれて。」

王様「門番が」

女性「あー。これ。言っちゃダメなやつだった。いえ。はい。塀を乗り越えて自力で。はい」

王様「そうですか」

女性「すいません。さっきの門番さんの件は聞いていなかったことで」

王様「ああまあいいですよ。いつかはこういう日が来ると思っていましたから。」

女性「あ？ああ。そうですか」

王様「どうぞ。せっかくですので。中へ。八木！八木」

執事「はい、王様」

王様「お客様だ」

執事「かしこまりました」

女性「えっと」

王様「お座りください」

女性「でも」

王様「お気になさらず、奴隷ですので」

女性「あ、じゃあ。」

女性「大きな敷地ですね。」

王様「1000億円。管理費だけで。」

女性「はあ。」

王様「この家に保つためだけに、働いているようなものですから。」

女性「大変ですね」

王様「紅茶にはレモンがミルクをおつけしますか」

女性「紅茶はちょっと。」



王様「ああそうですね。妊娠されてるんですか？」

女性「ええ」

王様「産むんですか？」

女性「一応、そのつもりです」

王様「そうですか」

女性「はい」

王様「今日はどのようなご用件で？」

女性「いえ。ああ。王子くんが学校に来ていないことはご存じですか・？」

王様「ああ。存じていますけれども」

女性「今は、どちらに？」

王様「部屋にいますよ」

女性「ああ。そうですか」

王様「今、躰をしているところで」

女性「躰というと？」

王様「大したことはありませんよ。窓のない真っ白な部屋のなかに入れ、椅子にしばりつけ、にこにこぶーんのオープニングテーマをエンドレスに聞かせ続けるといった簡単なものです。」

女性「そうですか」

女性「いやはや、親というのなかなか大変な仕事ですよ」

女性「あの王子くんは望まれて生まれてきたんですか」

王様「それはもちろんですよ」

《親対先生》

王様「完全なる

母親「事故で」

王様「計算で」  
母親「あの子ができました」  
王様「いやー計算をミスったのか、生まれてきたのはとんだできそこないでした」  
母親「私は混乱しました」  
王様「取り乱しました」  
母親「こんなはずじゃありませんでした」  
王様「だって、」  
母親「私は」  
王様「いくつかの計画を練り直さなければいけませんでしたからねえ・・・」

母親「私は悩みました。おろすべきが、」  
王様「産むべきか」  
母親「何かの気の迷いだったのでしょうか」  
王様「希望を見ていたのでしょうか」  
母親「あてつけだったのでしょうか」  
王様「見栄だったのでしょうか」  
母親「私はあの子を」

王様「産むことにしました」  
母親「産んでみてはじめて気づいたことは」  
王様「そんなに甘いものではないということです」  
母親「もちろん、自分じゃなにもできなし」  
王様「自分とはまったく違う」  
母親「他人」  
王様「でした」  
母親「私は正直引きました」  
王様「なんで、こんなこともできないんだろうか」  
母親「なんでこんなにも私が犠牲にならなければならないのだろうか」  
王様「だけど私は」  
母親「だから私は」  
王様「彼を鍛えることにしました」  
母親「彼女を捨てることにしました」  
王様「なんどもなんども」  
母親「いろんな場所に捨てにいきました」  
王様「いろんなことを試しました」  
母親「それでも、あの子は帰ってきました」  
王様「それでもあの子はダメでした」  
母親「なんどでも、なんどでも帰ってきました」  
王様「なんどやってもダメでした」

母親「私もいいかげんあきらめることにしました」  
王様「もう彼に」  
母親「彼女に」  
王様「期待をするのやめよう」  
母親「10年間を貸してやろう」  
王様「はじめから期待しなければいろんなことが許せるかもしれない」

母親「仕事だと思えば一緒に暮らせるかもしれない」

王様「とにかく最低限」

母親「一人でなんでもできるようになるまで」

王様「悪いことをせず育ててくれれば」

母親「それでいいじゃないかって」

王様「彼の10歳の誕生日に」

母親「私は彼女に」

王様「私は彼に」

母親「10年間であの子に費やしたお金の書いた長いレシートを」

王様「私が課したルールには絶対に従うというルールを」

母親「プレゼントしました」

王様「とさ」

母親「とさ」

王様「めでたし」

母親「めでたし」

女性「いや、ぜんぜんめでたくないでしょう」

男性「それでも親ですか？」

母親「ほら、よくいうじゃない。子供が生まれたら、急に親になっちゃうっていう。あれ。」

王様「先生。よく覚えておいたほうがいい。あれは迷信だ。」

母親「だって、私、未だにあの子のこと好きじゃないんだもん。」

王様「好きじゃないどころじゃない。嫌いなんだ」

母親「あの、顔も」

王様「目も」

母親「声も」

王様「しゃべり方も」

母親「考え方も」

王様「全部。」

男性「お言葉を返すようですが。」

母親「なんですか？」

男性「それは一般論ではない可能性もあるのではないのでしょうか」

母親「なに言ってるんですか？そんなはずないじゃないですか。」

王様「だって。先生。冷静に考えてみてくださいよ。子供っていったって、突然現れた他人ですよ。自分ではない人をそんなに無条件に愛せるはずないじゃないですか。仮に、愛せるっていう人がいたとしたら、そんなのは思いこみ。」

母親「刷り込み。」

王様「そういう自分に酔ってるいる人の、自分が演じていることも分からない愚か者だ。」

女性「じゃあ私は愚か者？愚か者っていうこと？」

男性「それでも僕は生徒たちのことを心の底から愛しています。」

母親「やだ、先生。またまた一。先生だってそうでしょう。」

王様「私だって演じているんだ。親っていうの役を仕事だと思って割り切ってやっているんだよ。」

母親「先生だってこれも、仕事なんでしょう。」

王様「その、表情も。こんな親に対する怒りだって、先生という職業上の義務みたいなものなんでしょう。母親「大変ね。お疲れさまです。」

王様「そういった意味では私達は同士ということになるわけだな。」

王様「ははははははは」

母親「うふふふふふ」

母親「でも。ね。ばれちゃうから、そういうの絶対。あの憎たらしい子には。」

王様「先生もおっしゃってくださいよ、本当のことを

男性「僕は」

女性「私は」

## 6章

---

《ライブチャット》

王子「僕は、いま、無菌室の中にいます」

女子「私は、いま、森の中にいます」

王子「無菌室の中に閉じ込められながら」

女子「森の中をさまよいながら」

王子「自問」

女子「自答します」

王子「ハロー」

女子「ハロー」

王子「ごめんなさい。またきてしまって。」

女子「いいよ。いつでもきてくれて。」

王子「ありがとう」

女子「なんか元気ないですね」

王子「まあねー。そっちもなんか元気ないんじゃない？」

女子「そう？」

王子「なんとなくだけど」

女子「どうですか、高校生活は」

王子「特になにもなしです」

女子「同じく」

王子「あのさ。たわいもない会話していい？」

女子「いいよ」

王子「えっと。」

女子「趣味はなんですか？」

王子「ゲーム。と……。子供と遊ぶことです。」

女子「へーそうなんだ。」

王子「子供はいいよ。子供たちは、この世界をまだ純粋に見ているんだ。どんな世界なのか、まだ何も知らなくて。はじめてみる世界をドキドキしながら、びくびくしながらみているんだ。だからね、僕は彼らを絶望させたくないんだ。なるべく素敵な世界を見せてやりたいんだよね。幻想でも、嘘っぱちでも、この世界は楽しいんだよって。僕は教えてあげたいんだよね」

女子「いいね。」

王子「でも一。もう会えないんだ」

女子「なんで？」

王子「自転車に乗れないから」

女子「そっか、それは残念だね」

王子「そうなんだよ。すごい残念な気分なんだ」

王子「そっちは？趣味なんかあるの？」

女子「私は読書」

王子「いいね。」

女子「本はいいよ。知識は私の世界を広げていって、私に武器を与えてくれるの。本の中には世界があって、ページをめくるたびに、その世界が私の中に広がっていくの。だから本を読んでいるときだけは、現実のいろんなこと考えなくて済むんだよね。」

王子「いいね」

女子「でも、もう読めないんだ」

王子「なんで？」

女子「燃やされちゃったから、本」

王子「そっか、それは残念だね」

女子「うん、すごく残念な気分なんだよ」

王子「ねえねえ。」

女子「ん？」

王子「僕らの自由っていうのは一体どこにあるんだろうか」

女子「そうね」

王子「結局のところさ、戦わなくちゃいけないんだよね」

女子「そうなんだよね」

王子「でも、どうしてこんなに怖いんだろう。嫌なんだろう。考えただけでドキドキするよ」

女子「うん」

王子「これもみんな組み込まれたものなのかな」

女子「でもさ、私っていう人間がほとんどすべて組み込まれたものだったとしてもさ」

王子「うん」

女子「ほんの一部だけでも、そういう組み込まれていない、私自身っていうのが残されているんだよね。だから、こんなに苦しんだよね」

王子「そうだね」

女子「でも、残されたそいつのためにも、私たちは戦わなければいけない」

王子「そうだよね」

女子「でも、できるのかな」

王子「体は十分大きくなった」

女子「知識もだいぶ蓄えた」

王子「あとは」

女子「あとは」

王子「僕は想像する」

女子「私は想像する」

王子「父と殴り合いのけんかになって

女子「母と壮絶な言い争いになって

王子「最終的に僕がマウントポジションをとって

女子「最終的に私が母を説き伏せて

王子「父の顔をぼこぼこに」

女子「母はパクパクと」

王子「殴りつけている光景を」

女子「何もいえなくなっている光景を。」



王子「やってやる」

女子「やってやる」

王子「僕はもう、お前らのいいなりになんてならない」

女子「私はもう、大人なんだ」

王子「どうにか一人でやっていくんだ」

女子「いくぞ」

王子「いくぞ」

王子「3」

女子「2」

王子「1」

女子「1」



《王子の家》

女子「ただいま」

王子「あの、その」

母親「あら、おかえりなさい」

王様「なんだ、自転車にのれるようになったのか？」

母親「遅かったわね」

王子「いや、あの、その、なんていうか」

母親「私、お腹すいちゃった」

王様「なあ。俺は今質問をしているんだ」

母親「お腹空いちゃったっていつてるの」

女子「はい」

王子「八木ちゃんが」

王様「八木ちゃんがどうした」

王子「八木ちゃんもっていれば20mくらい乗れるようになりました」

王様「なあ。お前は国語の授業をちゃんとうけているのか。俺は今、乗れたのか、乗れていないのという質問をしているんだ。押さえてもらって乗れたことは、乗れたことになるのか、ならないのか？」

王子「いや、国語では、できるとできないの間にも答えがあるって」

王様「できているのか？できていないのか？」

王子「できていないです」

王様「だよな」

王子「はい」

王様「じゃあ。なんのようだ」

女子「ねえ、お母さん」

王子「えっと。だから、」

母親「なあに？」

王様「なんだ」

女子「働いてよ」

王子「ソニック・ザ・ヘッジホッグって知ってる？」

母親「嫌よ」

王様「お前と私とソニックザズヘッジホッグの間にどのような関係があるんだ」

女子「じゃあ、私、出てっちゃうよ。」

王子「だから、その何を言いたいかという」と

女子「それで大丈夫なの？」

母親「それは無理ね。私、死んじゃうわね。」

王様「報告は結論からしゃべるんだ」

母親「え、これは脅しなの。」

王様「どうしたいのか、なにをしたいのか、」

母親「私が働かなかつたら、私を殺すって言う脅しなの？」

※王様「そのためにどのようなスケジュールをくみ、どのような懸念材料があるかを議論し、リスクを最小限に抑える。」

※母親「まあ。恐ろしい。私があなただけのことをお金をかけて生かしてきたのに。貴方はその恩を仇で返すの？」

※王子「だから僕は、東京ゲームショウにいきたいんだよ。」

※女子「私だって、普通に遊びたいんだよ」

女性「陣痛NOW」

王様「お前何か勘違いしていないか」

母親「私だって遊びたかったわよ。」

王様「みんなで一緒に東京ゲームショウに行って、自転車に乗れるようになるのか」

母親「それを我慢して我慢して・・・・・・・・」

王様「それで、勉強ができるようになって、お金がかせげるようになって、政治がわかるようになって、それで、この国が治めれるのか治められるんだったら毎日いってきていい。」

母親「あなたのことを育てたんだから」

王様「東京ゲームショウに行って、この国を治められるようになるのか、ならないのか」

母親「あなたも我慢するべきでしょ」

王子「それは。パパの考えだろ。

女子「そっちが勝手に産んだんでしょ。」

王子「その考えを僕に押し付けるなよ」

女子「産んだからには愛する努力をするべきなんじゃないのかな」

王様「押し付けてるわけではない。」

母親「愛してきたでしょ」

王様「どっちが正しいかを考えろ っていつているんだ」

母親「感謝の気持ちを忘れるなって言っているの」

※王子「あ————。」

※女子「だから、感謝してるってば・・・」

女性「破水 I N G」

王様「なあ、その困ると癩癩を起すのやめない。バカみたいだぞ」

母親「へらへらへらへら」

女子「ねえ。私がどれだけバイトしてるかって知ってる？」

王子「ねえ。僕がいま、どんな気持ちだかわかる？」

※女子「朝5時に起きて、新聞配達バイトして、学校に行って、勉強して、5時から10時まで居酒屋でバイトして、10時から2時までは、ライブチャットやって」

※王子「自転車ができるようになるまで、パパは僕に毎日自転車の練習をしなさいっていうだろ。だから僕は、忠実にそれに従おうとするさ。」

王子「だから、友達からカラオケに誘われようと」

女子「バイトして

王子「映画に誘われようと」

女子「バイトして

王子「クラスで飼ってたカメが死んで、みんなでそれを埋めに行くときも

※女子「バイトしてバイトしてバイトして」

※王子「断って断って断りまくった。」

女子「日々の生活だって今後の未来だって一つ一つ自分の力で獲得していかなきゃいけないんだから。」

王子「僕にはやることあるからって」

女性「出産WILL」

男性「あ、僕、ちょっとこれにて、ドロン！！！！」

王子「当然のことながら、次第に、みんなは僕のことを誘わなくなった。」

女子「他の子たちは、学校から帰ってきたら、ご飯が用意されているんだよ」

王子「まあ普通だよ。いつだって、どんなときだって、断るんだからね。」

女子「鉛筆も消しゴムも教科書も親に買ってもらっているんだよ」

王子「断るのは、僕にとってもつらかったから、まあそういうのがなくなったのはよかったんだけどさ」

女子「誕生日には普通にプレゼントとかもらうんだよ」

王子「これだけしても。まだ、脅迫観念は消えるなかった。」

女子「他は他、うちはうちってお母さんはいうでしょ」

王子「まだ、費やすものがあるんじゃないだろうか。」

女子「だから、そうだよなあ。そうなんだよなあって私も思って」

王子「もっと、自分のなかに捨てるものがあるんじゃないだろーかって。」

女子「もっと、おおらかな気持ちでいなきゃて」

王子「だから、部屋の掃除をする時間すら」

女子「むかつくって気持ちすら」

王子「テレビを見る時間すら」

女子「殺したいって気持ちすら」

王子「髪を乾かす時間すら罪の意識が付きまとった」

女子「すべて押さえ込んで、完全な理性的な人間として生きようって」

王子「そんな暇があるんだったら自転車の練習しろよって。おい、何遊んでいるんだよ。おい。しっかりやれよ。そんな風に時間を無駄にしているからいつまでたってもできないんだよって」

女子「だから、そういうときは本を読むの。」

王子「まだたりないでしょ。努力する時間がさ。」

女子「そうすると現実のことを少しだけ忘れられて、心がスーってするの」

王子「いつか、この努力が何かを越えたときにふとできるようになるんだろう」

女子「だから本を焼かれたことに関しては一まだゆるしきれてなくて一。」

王子「それがいつかはわからないけど、やるしかないわけだろう。」

女子「だって。あれは、本当に大事にしていた本だから。本だけに？」

王子「そうしてくれなきゃ、僕は許されないわけだろ。」



女子「小さいでしょうか、小さいですよ。」

王子「パパは許してくれないわけだろ。パパは認めてくらないんだろ、パパはほめてくれないんだろ」

女子「でも、私にとっては、本当に本当に大きいことなんですー。本だけに？あははは。爆笑」

※王子「パパ、パパ、パパって。パパっていうのだってホントは嫌なんだからね。高校生にもなってパパって言ってるひとなんて他にいなんだからね。なんで、パパって言わせただよ。もう。パパってもう、言いたくなーいんだよ！  
パパじゃなくて、オトン、ファザー、ダッド、父さん。親父」

※女子「——うん。だから、買ってきて、探してきよ。ブックオフでもいいから、今すぐ！早く！」

王様「あはははっは」

母親「ははっはは」

王様「それで？」

母親「それで？」

王様「お前に私が倒せるのか？」

母親「じゃあ、産まなきゃよかったの？」

王子、王様に相撲をとりに行く。王子、ガンガン打ちのめされる。

女子「そー——うだよ。まったくもってその通りだよ。養えないのに産むとかほんとバカだよ。私だったら絶対にしない。だって！生まれてきた子供がかわいそうだもん」

母親「じゃあごめんね！産んじやって！ほんと私、間違っちゃって！ほんとにごめんね！産んじやって。」

女子「そうだよ！最悪だよ。産まなければ、お母さんももっと幸せだったのに。こんなやりとりだってせずに済んだのに。私だってこんな気持ちにもならなかったのに。でも、もうそんなの言っても遅いから。生まれちゃってるんだから。いま、実際に私、ここにいるんだから。だから、責任をとってって言ってるの。他の子と同じように普通に愛する努力をしてくださいよ、もしくは、殺してくださいよ」

母親「軽はずみにそんなこといってるんじゃないわよ、私がどれだけ、あなたが不意の事故とかで死んで

くらたらって、願ったことがあると思う？その中でどうにか生かしてやってきたのよ」

女子「なんてこと言ってるの？信じらんない。最低のクズなんだけど」

母親「殺してって言ったのはあんたでしょ？あんたが殺してほしいんだったら、殺してあげようか。安楽死っていうことよね。おろすことと、あんまりかわないわよね」

女子「だから、私はちゃんと愛せて言ってるの」

母親「愛してるわよ。愛そうとしてるわよ」

女子「全然、その努力、伝わらないんだけど」

母親「だって嘘だもん」

女子「嘘ついてんじゃねーよ」

母親「嘘じゃなきゃどうやって愛すればいいのよ」

女子「普通は愛しいって思うんだよ。親ってというのは」

母親「知ったような口聞いているんじゃないわよ。親にもなったことないくせに」

女子「愛さなきゃいけないの」

女子「どうして、愛さなきゃいけないの」

女子「だから、産んだ責任だっていってるでしょ」

母親「責任で愛せると思う？愛ってっていうの感情なんだよ。そんなので愛せるはずないじゃない」

女子「じゃあどうしたらいいのよ。」

母親「だから、演技をしろっていうことでしょ。

別に待ってもいないのに、待ってた感じでおかえり〜って言って。

買いたくもないのに、プレゼントを買って。

そういうことでしょ。愛していないのに」

女子「愛していないとか いわないでよ。ちゃんと嘘をつきとおしてよ」

母親「無理でしょ？ 私、演技下手なんだから」

女子、泣く

王子、泣く

王子「僕はもうパパとか関係なく生きていきたくないんだよ」

女子「ちょっとは期待した私がバカだったってことでしょ」

母親「え、出ていくの？出ていくの？」

王様「お前、一人で何ができるんだ？」

王子「自分で考えて、自分の好きなように、生きていきたいの」

女子「あんたになんて二度と期待しないんだから」

母親「親のせいにしてるんじゃないわよ」

王様「結局はお前が決めることなんだよ」

王子「わかってるよ！」

母親「だから？」

王子「お前の」

女子「存在自体が」

王子「邪魔なんだ」

王様「だから？」

王子「だから・・・火を・・・」

女子「・・・つけます」

母親「あら、面白い」

王子「周囲の風確認」

女子「南南西の風、時速3 km」

王子「風弱まり次第着火します」

女子「弱まりました」

王子「・・・火をつけ」

女子「礼」

王子「さようなら」女子「さようなら」

王様「はい、さようなら」

母親「はい、さようなら」

男性「ミヨちゃん」

女性「ブタゴリラさん」

男性「生まれた？」

女性「生まれた、双子」

《門番》

そうして、王宮は焼け野原になり。

今では、王様はどこか遠くの山の小さな家で

執事の八木ちゃんと一緒に慎ましやかに暮らしているということです。

でも、まあそのくらいがいいですよ。親なんてのはね。

ちなみに、王子くんは山口となのり、どうっかでどうにか一人でやっているということです。

というわけで、ぼくは仕事を失いました

まあ。もともと僕の仕事なんてのはあってなかったようなものなんですから、いいんですけど。

僕は、兄弟3人で仲良く暮らそうと思います。歌でも歌いながら。

はい。そんな感じです。

《先生》

男性「生まれちゃいました」

女性「産んじやいました」

男性「いや、僕は、ほんとに、聖職者なんですけど、子供とか全然だめで、愛することとかよくわからなかったんですけど・・・子供実際、生まれてみて、まじ、子どもかわいくて」

女性「ということで、夫婦のルールを発表したいと思います。

女性「ひとつめ、子供に迷惑をかけること。」

男性「ほんとダメ」

女性「どんなに二人の仲が悪くなくても、子供には関係ありません。」

男性「関係ないし」

女性「責任をもって愛していきましょう」

男性「そうだよね」

女性「二つ目。子供を大切にすること。」

男性「大切だよ」

女性「どんなに憎たらしくて、どんなに不細工でも、バカでクズで、でくの坊のキチガイでも。あなたの子供です。演技でも嘘でも愛していきましょう。」

男性「三つ目はルールはルール。ルールル、ルールル♪」

女性「そうして生まれてきたのが」

男性「長女。ふじ子」

ふ子「あぎゃ！！！！」

女性「長男。ふじお」

ふお「くえーー！」

※男性「笑わないでください」

※女性「私たちの子供です」

女性「みなさんはこの子たちの顔をどう思いますか」

男性「かわいい」

女性「私もかわいいと思います、いや、ほんとに。演技とかじゃなくて、リアルに、ガチで」

男性「おーい。ふじ子、ふじ男、フリスリビーするぞー！」

ふ子「ばびゃあー！！」

ふ男「はぎゃあー！！」

女性「子供を産んで、はじめていろんなことを知って、気付かされることもすごくおおくて。親にとっての教育者は、子どもなのかもしれないですね、てへ」

《自立》

王子、教室の掃除をし t げいる

王子「よし。つと。」

王子「あ、もうあがりですかー」

女子「あ、うーん。あ、山口先生も？」

王子「あ、はい。」

女子「そっかそっか。あ、今日給料日じゃんね」

王子「そうですね」

女子「え、てか。山口先生、初給料じゃない？」

王子「はい。そうです。」

女子「もっと、よろこべー」

王子「いや。喜んでますよ。」

女子「あ、そうなの」

王子「はい」

女子「ごはん食べる？」

王子「あ、食べます。あ、今日は彼氏とのご予定は？」

女子「ないです。というかいちいち聞かないでください」

王子「すみません」

王子「なに食います？」

女子「ケバブとかどう？」

王子「あ、いいすねえ」

女子「よし」

王子「あ、いや、どうしよっかな」

女子「あー無理しなくていいよ」

王子「ちょっと家でやるべき仕事があるんですけど・・・いや、いい。大丈夫です。明日の朝やります」

女子「いいの？」

王子「いいんです」

女子「うむ」



王子「じゃあ。すぐ支度しちゃいます」

女子「タメなんだから敬語にしなくてもいいよ」

王子「え、いや、でも。ここに入ったのは先輩なんで」

女子「あ、っそう。そんなに気を遣わなくてもいいのに」

王子「すみません。」

女子「初給料で何買うの？」

王子「そうなんですよね。いま、それ、考えているんです。」

女子「彼女さんへのプレゼントとか」

王子「まあそう。それははい。しようかなとは、思ってますね」

女子「そっかいいねー。あとは親かー。」

王子「そうなんですよねー。なんかあげたんですか？」

女子「私はね。皿洗い機あげた」

王子「すごいですね」

女子「うちの親、家事とか全然だめだから」

王子「そうなんだ。へえ。いっすね。そっか。じゃあ、何にしようかな

女子「支度できました？」

王子「あ、はい。とっくに。手ぶらなんで」

女子「言えや。」

王子「バック重そうですね。え？本すご。さすが、国語の先生」

女子「まあねー」

女子「よし。じゃ。いきますか」

王子「・・・あ、足湯セットとかいいかも」

女子「あ、いいんじゃない？」

電話

王子「あ、おれ？」

女子「あ、わたしわたしわたし」

王子「いや、俺だ」

女子「あ、二人ともだ」

王子「はい、うわさをすれば。お父さんですよ。」

女子「こちらは、お母さんですよ」

王子「出ますか」

女子「でましょーか」

王子「うん」

二人「はい。もしもし」

幕